



ザ・ホッティ！

The Hottie!

ブライアン 作

前橋梨乃 訳

Contents

(タップすると、章頭に移動します。)

【番宣】

【レディたちの紹介】

【第1回放送】

【第2回放送】

【第3回放送】

【第4回放送】

【第5回放送】

【第6回放送】

【スペシャル特番】

【番宣】

もっと面白いテレビが見たいって？
じゃあ、こういうのはどうだい？
この白鳥のような美女たち……じつ
は彼女たち全員が、男だと言ったら？

「仕掛けはバッチリ？」や「格差社会アップダウン」なんて、もう古い。
リアリティTVは、今や新時代に突入する！

「冷蔵庫との玉の輿」よりセクシーで、「盲目男にオカマの目」よりクレージー、「宗教ブートキャンプ」よりもショッキングな……

そう！ それが、この秋スタートの新番組……『ザ・ホッティ！』だ。

男なら、夢を実現するために、どんなことにだって耐えられるって？

じゃあ、その夢のために、男を捨てると言われたら？

超美人を彼女にできるような勝ち組になるために、自分自身がその超美人になれと言われたら？

「これまでのリアリティTVって、本当のところ、少しもリアルじゃなかったよね。だって、挑戦者がリアルなリスクをしょってないんだからさ」

そう語るのは、この番組のプロデューサー、「偉大でデブでスケベなユダヤ人」や「ボーリング・フォー・オーファンス」でおなじみのファン・ベナダ。

「収録が終われば、挑戦者は、まちがいなくもとの生活に戻る。結局、カメラの前だけのやらせてことだろ。この『ザ・ホッティ！』は、そこがちがうんだ。優勝者はもちろん、挑戦者

はみんな、カメラのまわってないところでも……そう、たとえばトイレでも、便座を上げたまま使うことは許されない。いや、収録中の1年間だけって話じゃない。へたすりゃそれが、一生ってことにもなるんだ」

8人の挑戦者に課せられたテーマは、いたってシンプル。

……1年間、女になって暮らすこと。

といっても、ドラァグクイーンのコテストではない。けばけばしさを競うのではないし、いかにも女装しましたという姿は許されない。

高いヒールのブーツで歩く姿が、ふつうの女に見えないとジャッジされれば、ただちに脱落。

もし、外出先でリード(read)されたら、つまり誰かに男だと見破られたら、そのままバスに寄せられ、帰される。

「いやなら、『レディたち』はいつだって番組を降りられる。僕らは、それを止めたりしない」

そう語るのは、ディレクターのG・ゴードン・グレイソン。代表作は「あなたが留守の間に一空き巢編一」「車いすのポン引き」。

「もちろん彼女たちは、全国の視聴者にすべてを見られる。ブルート(※)からオブセッション(※)への変化や、フルート・オブ・ザ・ルームス(※)からビクトリアズ・シークレット(※)への変身をね。それだけじゃなく、撮影が終わった時には、ひとりの女の子として、それを使いつづけたいって思ってるかもしれないな」

(※訳注 ‘Brut’ = 男性用コロン ‘Obsession’ = カルバン・クラインの香水 ‘Fruit of the Looms’ = 廉価な若者向け下着 ‘Victor

そんな勇気ある挑戦者8人は、選考会場に集まった18歳から25歳までの男たち数千人の中から選りすぐられた者だちだ。

オーディションにこれだけの人数がやって来たのは、彼らが「ブサイク男からの変身」というテーマ告知を信じたから。でもそれが、12ヵ月間、すね毛を剃って暮らすことだと告げられ、全員がたじろいだ。

それでも立ち去らず、女になるという挑戦を受けて立ったのはおよそ100人。

しかしそれも、その後2ヵ月にわたる訓練期間中に大多数が脱落。残ったのが今の8人というわけだ。

彼らは今、2チームに分けられ、番組が用意した2棟の「女子寮」で暮ら

している。

いいかい、君たち。トイレで便座を上げちゃいけないんだぜ！

なにしろ君たちは、毎日24時間、女なんだから！

彼らにそれを守らせるお目付役、つまり寮母として、2人の女性が選ばれた。スザンヌ・ダンフォースとルペ・ロドリゲスだ。

「このお話をいただいた時、すぐさまお受けしますって言ったのよ」

スザンヌ・ダンフォースは、現在40歳。元女優で、今はプロのメイクアップアーティスト兼スタイリスト。

「私が腕をふるえば、あの子たちだって、自分の姉妹にさえ見破られなくなるわ。ま、それは言い過ぎとしても、少なくともあの子たち自身は、鏡を見

た瞬間、そう感じるでしょうね」

25歳のルペ・ロドリゲスは、そこまで自信满满ではないが、自らが元ミス・チリという美人。南米でモデルをしながら、アメリカのリアリティTV、たとえば「浮浪児と乳母555-1212」などのセクシーな仕掛け人として活躍している。

挑戦者たちを「彼」から「彼女」に変えるのは、この二人だけじゃない。自分の身内から女性を一人選び、後見人にできる。現実の女とはどういうものか、折に触れ、アドバイスする役目だ。

さらに、この番組が徹底しているのは、日々のメイクやヘアケア、ファッションや立ち居振る舞いのレッスンに加え、女性ホルモン投与まで行うこと。その効き目を検証するため、「エスト

ロゲン・チャレンジ」と題し、毎週、挑戦者たちに新たな課題も出される。

(残念ながら、放送回数の都合上、それらすべてをお伝えすることはできません。何ヵ月かを割愛して編集することもあります。)

エストロゲン・チャレンジでふるい落とされた挑戦者……いや、女の子たちには、家に帰るためのチケットとともに、それまで身につけた衣装すべてが渡される。ただし、男に戻れば用をなさないそれらの衣装代金は、すべて自腹だ。

さあ、そんなリスクに男らしく挑戦し、女になりきるのは誰だ？

その試練に耐え、最終回まで残った「TVTVスター」2人には、最終決戦が待っている。それを勝ち抜けた最高にホットな女の子には、永遠に「ザ

・「ホッティ」の称号が贈られる。賞金は、なんと税抜き500万ドルだーっ！

【レディたちの紹介】

クリス(女性名同じ)

年齢：20歳

職業：スポーツトレーナー(アルバイト)

出身：シカゴ

趣味：野球、ギター、バスケットボール

好きなフットボールチーム：ベアーズ
「ほんとのこと言って、こんな馬鹿馬鹿しいこと、やりたくないさ。でも、去年のシーズン中にアキレス腱切っちゃってさ。スポーツ入学だから、奨学金とめられて大学も休学中ってわけ。この番組の収録中は、出演料も出るし、1年かけてゆっくり故障もケアできると思ったんだ。直ったら、秋からでも復学するつもりさ。それに、もし優勝

できれば、今後の学費の心配だってないだろ。……がんばれ、ホワイトソックス！」

クリスの後見人：ジェナ(友人 19歳)
「クリスは男っぽい人よ。だから、女性アスリートにはなれないと思うわ。でも、1年もスカート履いて暮らしたら、やっぱり、もとのままじゃいけないでしょうね」

=====

ブライアン(女性名ブリアナ)

年齢：21歳

職業：学生(研究者志望)

出身：セントルイス

趣味：読書、テレビゲーム、クラシック音楽

好きなフットボールチーム：ラムズ
「コメント？ しなきゃいけないの？
……まあ、確かに僕は、マツチョってタイプじゃないよ。スポーツは苦手で、本ばっかり読んでるし。なのに、来年は卒業しなきゃいけない。ほんとは大学に残りたいんだ。だけど、問題はお金さ。もし、この番組で優勝できれば、院に進めるだろ。そしたら、心理学の博士号をとろうと思って」

ブライアンの後見人：レア(母 44歳)
「ブライアンは、あの年になるまでまともな恋愛経験もないのよ。女の子に対して臆病すぎるんだと思うわ。だから、これもいい機会だと思って賛成したの。自分自身が毎日お化粧して過ごせば、少しは女の子の気持ちもわかって、積極的になれるでしょ」

=====
カール(女性名カーラ)

年齢：20歳

職業：トラック運転手

出身：サンフランシスコ

趣味：バックパッキング、カヌー、山歩き

好きなフットボールチーム：ジャイアンツ

「まあ、自分自身、大学は中退するだろうと思ってたね。それに、9時5時の仕事にも向かないって。この番組に出る気になったのも、要するに、賞金が入れば仕事しなくてすむからさ。そしたら、何年間か世界中を放浪して暮らせる。それを思えば、何ヵ月かすね毛なしで過ごすなんて、どうってことないさ。ピース！」

カールの後見人：エイミー(妹 15歳)
「お兄ちゃんのことには大好きよ。でも、私ずっと、女のきょうだい欲しかったの。この1年間、それがかなうんだもん。なんだかワクワクするわ」

=====

デビッド(女性名ディーナ)

年齢：23歳

職業：ウェイター／俳優

出身：ロサンゼルス

趣味：演劇、音楽

好きなフットボールチーム：レイダース

「この5年間、ハリウッドで苦勞してきたんだ。だから、この番組がブレイクのきっかけになればと思ってさ。優

勝できれば、今後のオーディションにも有利だろうし。……えっ？ ああ、わかってるよ。でも、テレビ番組はテレビ番組だろ。勝負を決めるのは、結局、演技力だと思うんだ。僕は、どんな役だってこなしてみせるさ」

デビッドの後見人：レベッカ（妻 25歳）

「同じ役者の目から見て、デビッドが、そのうち、ハリウッドの舗道に名前を刻まれるようなスターになる人だってわかるの。そのためなら、1年間、姉妹になるなんて、どうってことないわ」

=====
ニック（女性名ニッキ）

年齢：22歳

職業：バーテンダー

出身：マイアミ

趣味：パーティ

好きなフットボールチーム：ドルフィンズ

「じつは俺、カード破産すれすれなんだ。500万あれば、催促におびえることもないし、その上、大きなおつりが来る。ワオ！」

ニックの後見人：キア（恋人 20歳）

「ニックって面白い人よ。でも、絵に描いたようなだらしない男。将来のこと考えると、それが不安なの。この番組で女をやれば、少しはまともになる気がして……。あっ、私がそんなこと言ったって、彼には言わないでね」

=====

ティミー(女性名タミー)

年齢：18歳

職業：無職（最近、高校を卒業）

出身：ネブラスカ州トゥーリバー

趣味：バスケットボール、狩猟

好きなフットボールチーム：コークハスカーズ

「これまで、一回もネブラスカを出たことがなかったんだ。だからなにより、外の世界が見てみたくて……。トゥーリバーを離れるには、軍隊に入るって手もあるけど、それは気が進まないしね。で、チャンスはこれしかないって思ったわけ」

ティミーの後見人：サラ(友人 18歳)

「私も同じ町で育ったから、ティミーの気持ちはよくわかるの。でも、これが彼にとっていいことだとはどうして

も思えない。この番組が放送されたとたん、彼は町には帰れなくなるわ。せめて、優勝してくれることを祈るしかないわね」

=====

ロドリゴ(女性名ラモナ)

年齢：20歳

職業：出稼ぎ労働者

出身：シューダッドファーレス（メキシコ）

趣味：サッカー、大工仕事

好きなフットボールチーム：「私、メキシコ人ね。忘れた？」

「仕事、カリフォルニアの農場。給料1日10ドル。穫り入れ終われば、首切られて国外追放ね。アメリカ、金ない外国人、許さない。金入ったら、もっ

といい暮らしができる。結婚もできる」

ロドリゴの後見人：ピラル（婚約者・
スペイン語から翻訳）

「ロドリゴはいい男です。だから、早く一緒になりたいと思っています。だけど、そのために、アメリカのバカな番組に出るなんて……。でも、それだけの賞金が入れば、すぐ結婚できるし家だって買える……」

=====

ティラー（女性名同じ）

年齢：19歳

職業：コック／ミュージシャン（ベース）

出身：ボストン

趣味：音楽、旅行

好きなフットボールチーム：パトリオツツ

「べつに。……だめ？ まあ、この2年間で3つのバンドを渡り歩いたからね。でも、全然芽が出なくてさ。で、このセッションで、なんか新しい展開でも出てこないかと思って。それに、出演料だけでも、エフェクターとか買えるわけだし」

ティラーの後見人：ジェフ（友人 20歳）

（プロデューサー注：本来、後見役は女性がやることになっており、当初は妹のターニャを予定していた。ところが、寸前になって、仕事の都合で辞退したいと申し出があり、急遽、彼に変わってもらった。）

「……まったく、わけわからん。なんで俺なの？ 俺に、化粧や女物の服のア

ドバイスをしろってか。んなこと、できるわけないだろ。まあ、似合ってるかどうかくらいは、言えるだろうけど……」



【第1回放送】

第1回收録時にはすでに、挑戦者8人の女の子としての生活は6ヵ月を経過していた。だからこの回は、いきなり、その厳しい訓練の成果をスタジオの観客たちに披露するという形で始まった。

審査員として選ばれ、スタジオに集められた人たちは、8人の男性挑戦者の姿を予想していたのだろう。だから、イブニングドレス姿でステージに登場した8人の魅力的な若い女性たちの姿に、大きな歓声とともにどよめきが起こった。

さらに、目の前の美人たち一人一人に思わず見とれ、そのたびに、それがじつは男性なのだということを思い出したにちがいない。どよめきは、なかなかおさまらない。

「これでおわかりでしょう。この番組が、けっして安っぽいコメディを見せようとしているのでないことが」

プロデューサーのファン・ベナダが観客に向けて語りかける。

「私たちは、挑戦者の男性たちを笑いものにしようとして、女性になるための厳しい訓練を課しているのではありません。ここにいるみなさん、それに全国の視聴者のみなさんも、男性でありながら、ここまでみごとに自然な女性になっている彼らの努力に、惜しみない拍手を贈ってください」

挑戦者たちの姿は、確かに、6ヵ月前のオーディションと比べ、驚くほど変化していた。

ステージに並んだ挑戦者たちが、ひとりずつ前に出ると、それに合わせて、背後のスクリーンにそれぞれのオーデ

イション時の写真が映し出される。かつて無精ひげとぼさぼさ頭でそこにいた若者が、今はみんなプリンセスになっている。

すらりとした脚、そして、しなやかな腕、ドレスから出たその肌はすべすべで、どう見ても女性としか思えない。

いったいなにが、彼女たちをここまで変えたのか？

「すべて私の力……って言いたいところだけど……」

スクリーンに映し出されたのは、寮母のひとり、スザンヌだ。

「手柄を一人占めにはできないわね。男としての鑄型をたたきつぶすために、私とルペは、かなり厳しいことも言ったわ。でも、誰もそれに逆らうことなく、従ってくれたの。賞金のためではあるにしてもね。すね毛を剃ることにも、ブラを着けることにも、抵抗

はあったと思うけど、いやだとは言わなかった。毎日何錠か飲んでるエストロゲンが、精神的にも作用してるっていうことかしら」

「ええ、エストロゲンの服用はたしかに大きいわね」

画面が変わり、次に登場したのは、もう一人の寮母、ルペだ。

「あの薬がなかったら、8人とも、ここまで女の子っぽくはなれなかったと思うわ。でも、けっしてそれだけじゃない。それも含めて、女らしくなるためならどんなことだってするっていう彼女たち自身の気持ちがあるからでしょ。結局、そんな気持ちの強い人が、グランプリをとるんじゃないかしら」

ステージに並んだ人造美女たちは、たしかにみんな女らしかったが、よく見ると、その女らしさには、それぞれ

の個性がにじみ出ている。

例の女子寮で過ごした6ヵ月間で、男っぽい行動が厳しく規制された結果、もともとの個性が女として再編されたということだろう。

2チームに分けられたうち、スザンヌが担当する方は「チーム・フォックス」と名づけられ、クリス、ブリアナ、カーラ、ディーナで構成されていた。

これまでの6ヵ月間が映像で紹介される中、それぞれへのインタビューが挿入され、各人が内心、何を感じていたのか、そして、どんなふうに性の変更に適応していったのかが語られる。

まずは、大学野球のスター選手だったクリス。彼女の場合は、よくも悪くも、アスリートとしてのキャリアが、転換のきっかけになったようだ。

「副作用が恐かったから、野球をやっ

てる時だって、ステロイドなんて使わなかった……のよ。それが今は、ホルモンづけ。おかげで、おっぱいはどんどんふくらんでくるし、ペニスは小さくなってる。筋肉も、ほら、こんなに落ちちゃって……。番組を降りる気になればいつで降りられるってことと、たとえ最後までやってもホルモンさえやめればもとに戻るってことで納得はしてるけど、内心おだやかじゃないのはたしか……ね。来年の春季キャンプまでに体が戻らなかったら、ぼ……あ、あたし、ロッカールームでどうしたらいいの？」

そこで大きなため息をついたあと、気を取り直したようにクリスはつづける。

「でも、まあ、シェープアップ用のプログラムが用意されてたのは、ありがたかった……わね。体さえ動かしてれ

ば、不安も忘れられるし。ウエイトトレーニングは禁止されたけど、それ以外のエクササイズなら、スザンヌも文句はいわない……のよ。朝は、準備運動のあと、音楽に合わせてエアロビやったり、ヨガをやったり。そのせいかどうかよくわからないけど、ほっそりした体になったのはたしかね。ジョギングに行くことも許されてるの。スザンヌの言うことをきいて、スポーツブラさえつければね。でも、走ってて人とすれ違うと、どうしても早足になっちゃう。……ううん、男だってばれることを心配してるんじゃないかと、恥ずかしいの。だって、この前なんて、何人かの男が、あたしを見て口笛吹いたのよ」

本の虫、ブリアナは、もっと哲学的なアプローチで、外見上の女らしさを

開花させたようだ。

「結局、ジェンダーって、社会関係上の概念でしかないと思う……のよね。逆に言えば、人からどう見られようと、心の持ち方ひとつってことでしょ。たしかに今のぼ……あたしは、ものすごく女の子っぽく見えると思う……わ。でも、心の中で、自分は男で、これからもずっとそうなんだって認識を持ちつついていけば、本質は変わらないんじゃない……かしら。このヒールはつらいけど……。でも、これを履いても、あたしの身長はそんなに高く見えないし、全員の中でいちばん小さいのはたしかでしょ。見かけだけなら、男っぽさからはいちばん遠い存在だと思うの。これって、かなりのアドバンテージよね」

そんなふうにするブリアナは、生活面でもさほど不満を持っている様子は

ない。

「もともと、あたしには、男っぽい趣味なんてないから、ここの暮らしで、そんなにがまんしなきゃいけないことなんてないの。インターネットも、スザンヌはべつにかまわないって言うし。ネット上でも、女の子として振る舞うって条件つきでね。ただ……、前は、毎晩2・3時間はチャットやオンラインゲームしてたのに、この頃、減ってることはたしかよね。週に1時間くらいかな。だって、チャットとかしていると、男の人がたくさん寄ってきて、アドレス教えろとか……。お願いだから、次にアクセスしたとき、オフ会誘ったりしないでね」

それに対し、アウトドアウーマン、カーラは、未だに、スカートとヒールに不満なようだ。

「ちょっと寮のまわりをぶらつくだけでも、スザンヌは、まるでダンスパーティーにでも行くような格好をさせる……の。ジムでロッククライミングの練習をするのも禁止されたし、前は毎週行ってた、州立公園の5マイルコースの山歩きさえダメだって。だから、ぼ……あたしは、スザンヌに手持ちの写真を何枚も見せて、カヌーやバックパッカーや山登りの仲間にも、数は少ないけど女はいるんだって、説明しなきゃいけなかった……のよ。いちおう納得してそのうち許すって約束してくれたけど、『その前に、キャンプ場で男から身を守るすべを覚えなきゃね』だって」

たぶん、全メンバー中、女っぽい振る舞いがいちばん身につけているのは、スターの卵、ディーナだろう。

「俳優として……あら、ごめんなさい。女優として、あたしずっと、感情移入する方法を勉強してきたんですもん。役になりきるんだって考えれば、べつに抵抗なんてないわ。朝起きた瞬間から、ディーナだと思っている自分自身に気がついて、笑っちゃうくらい。だから、ぜんぜん平気よ。今はむしろ、これが終わって男役をやらなきゃいけないなくなった時の方が、ちょっと心配」

もうひとつの女子寮で暮らす組、「チーム・キティ」も、それぞれのやり方で、この急激なライフスタイルの変化を受けとめているようだ。

「こんな不安定な気持ちで毎日を送るのなんて、生まれて初めて……よ」

そう言うのは、カントリーガール、タミーだ。

「だって、ぼ……あたしがどこから来

たか、覚えてる？ 100パーセント男
っぽくなきゃあ、ホモだって言われる
ような町……なのよ。ぼ……あたしは、
それがいやで町を出たかったんだけど
ね。家族や町の人には、今あたしがや
ってることなんて、とても理解できな
いと思うわ。それなのに今、あたしの
胸にはAカップのおっぱいがついて
る。もし優勝できなかつたら、とりあ
えずは、この体のまま帰らなきゃいけ
ないのよ。町の人たちがどんな反応を
するのか……。なんだか、身の危険さ
え感じるもん」

そんなタミーが最も仲良くなったの
は、メキシコから来たセニョリータ、
ラモナだ。

「タミーいてくれて、ほんとによかつ
たです。私……あたしの村も、タミー
のと同じおんなじ。コメ・セ・ディス

……あーん、英語では……そう、クロスドレッシングなんて、ぜったいダメ。だから、これしてるの、あたしとあたしの奥さんになる人、幸せな暮らししたいから。ただ、それだけ。それにしても、あたし、これまで、こんな上等な服、着たことないです。ドレスだけど、でも、こんな気持ちいい服、初めて……ね」

ロック娘、ティラーは、自分の経歴にアドバンテージを見つけようとしている。

「ぼ……あたしが生きてきたミュージシャンの世界じゃあ、女装なんて珍しくない……もの。まあ、最近のボーイ・ジョージは、好きになれないけどね。向こうのチームの女優の子には負けるかもしれないけど、こっちのチームじゃあ、あたしがいちばん抵抗ないと思

う……のね。この格好なら、イケてる
と思うわ。だって、ロックの世界には、
もっと気味悪いのがいっぱいいるんだ
もん」

ああ、こちらのチームには、もう一
人、問題児がいたんだ。パーティアニ
マル、ニッキ。どう見ても、彼女がい
ちばん、この状況に適応できていない
ようだ。

「ちっ！ 見てくれよ。おっぱいだぜ。
しかも、この女の園ん中で、いちばん
のデカパイときた。そのデカパイを、
こんな服……ホルターネックっていう
のか……そこからのぞかせて、鏡の前
で髪の毛セットしたり……まったく、な
にやってんだか、俺……あたし。もし
借金さえなかったら、すぐにでもやめ
てやるぜ……だわよ」

ともかくも、6ヵ月間のホルモンとメイクと厳しいトレーニングを経て、女の子たちは審査員にお披露目されたわけだ。しかし、じつは、ここでスポットライトを浴びる前に、いわばその練習として、彼女たちは、もっと親しいにお披露目された。

女の子になった姿を、初めてそれぞれの後見人に見せ、いっしょにディナーをとったのだ。

その映像とともに、直後の後見人たちの感想が流れる。

クリスの友人、ジェナ——

「ほんとのこと言って、私、彼を笑ってやろうと思って来たのよ。何年も前から、彼ったら私のこと、レズのプロゴルファーみたいだってからかうし、女子バスケの選手たちを見て『ブスばかり』とか言ってるしね。今度は彼

がそう言われる番だと思っていたの。でも、言えなかったわ。彼は、そんな段階、とうに通り越しちゃってたんだもん。一目見た瞬間に、この人、本気で優勝するつもりだってわかったわ。だって、もう、すごい美人じゃない。筋肉のごつごつした感じも消えちゃってるし、出る場所は出て、引っ込むところは引っ込んで。ドレスだって、私が負けそうなくらいうまく着こなしてるし。いっしょにいても、ぜんぜん違和感なかった。っていうか、まるで、仲のいい女友達とお喋りしてるみたいだったの。女の子がどんな気持ちでいるのかわかったんだもん、もう彼は、女の子たちをからかったり、バカにしたりしないわよね。これが終わったあと、クリスがどんないい男になってるか、楽しみだわ」

ブリアナの母、レア——

「ブライアンは……じゃないわね……
ブリアナは、とてもおしゃれとは言えない子だったし、社交的でもなかったわ。女の子とデートするようなこともなく、いつもTシャツと短パンで、夜はずっとパソコンの前に座りっぱなし……そんな子よ。だから、目の前に、あんなきれいなお嬢さんが現れたときには、ほんとにあ然としたわ。ドレスも、ヘアスタイルも、メイクも……自分の子供が、こんなにすてきな子だったなんて、初めて気がついた。まあ、今だけのことなのかもしれないけど……、でも、できれば今後もおしゃれとかに気を使ってくれたら、うれしいわ」

カーラの妹、エイミー——

「もう、びっくり！ だって、すっご

くかわいくて美人なんだもん。あんなすてきな女の子がお兄ちゃんだなんて、ちょっと信じられなかった。私、応援するから絶対に優勝してねって言ったのよ。それに、これからも、ずっとお姉ちゃんのままでいてって。さすがに、それにはうんって言わなかったけど、私、あきらめてないわ。じつは来年、久しぶりに小学校の同窓会があるの。その時、カーラお姉ちゃんが、おめかし手伝ってくれたら、どんなにすてきだろうって思ってるの」

ディーンンの妻、レベッカ——

「自分の夫におっぱいがあるのを見て、どう思ったかって？ ベつに、そんなに深刻にとらえてないわよ。だって、いずれ、もとに戻るんでしょ。それにね……ふふ、馬鹿なこと言うみたいだけど、あの人と私は、体格がほとんど

いっしょ。つまり、これが終われば、
今あの人の着ている服が、私のものにな
るってことでしょ」

ニッキの恋人、キア——

「ちょっとがっかりしたわ。これでニ
ックが変わってくれることを期待して
たのに。外見はともかく、中身はなん
にも変わってないの。会ってる間中、
服のことで文句言ったり、寮母さんの
ことを『あのアマ』とか言うし、いっ
しょにいる人たちのことを『オカマ連
中』なんて言うし……。きっと、彼は
逃げ出すつもりよ。で、また私の所に
転がり込もうなんて、甘いこと考えて
るにちがいないわ」

タミーの友人、サラ——

「私、彼の前で、笑顔をつくってるの
が大変だったの。……あっ、そういう

意味じゃないの。ティムは信じられないくらいきれいだったわよ。そうじゃなくて、私の側に、彼には言えない気がかりなことがいっぱいあって。ああ、神様……。じつは、町の誰かがこの番組収録のことを知ってしまったらしいの。今、町はその噂でもちきりよ。みんな、彼のことを、町の恥だっけののしってるわ。彼のお父さんでさえ『あんなホモ、もう息子でもなんでもない』って息巻いてるし。私、彼が優勝できるように、ずっと神様にお祈りしてるの。もし彼が、タミーの体のままで帰らなきゃいけなくなったら、きっと殺されるわ。ううん、オーバーに言ってるわけじゃないの。ああ、神様……」

ラモナの婚約者、ピラル——

(スペイン語から英語に翻訳)

「私の花婿は、花嫁になりました。」

ハンサムからプリティに変わってました。(翻訳者注：スペイン語の語感はずっときれいなのですが、英語では、どうもそのニュアンスが伝わりません。)じつは、彼と会ってる間、私、恥ずかしくてしかたなかったの。いえ、彼の着ている服のせいじゃなくて、私の服のせいで。だって、彼のに比べたら、私の方が、ずっとみすぼらしかったんだもの」

ティラーの友人、ジェフ——

「やつは、すごくかわいかった。だから俺は、やつにもそう言ったんだ。『すごくかわいいよ』って。……えっ？ 何がおかしい？ ……あつ、ごめん。たしかに今の言い方、ちょっと気味悪かったかもしれない。だけど……、ほんとにやつはかわいかったんだ。ほんとに、すごく……」

さて、そろそろ時間だ。

はたして来週は、挑戦者たちにどんなことが起こるのか？

そこで次週の「エストロゲン・チャレンジ」は——

あなたはまず、後見人とともに指定した高級ビューティサロンを訪れ、外出用のおしゃれをします。

そのあと、その格好で何をしたいか決め、1日を街で過ごします。

もちろん、その間、あなたは女性になりきっていないなければなりません。

もし、誰かに男であることを気づかれたら、その時点で、この挑戦をつづける資格を失います。

【第2回放送】

ビューティサロンに入ってくるとき、挑戦者たちはみんな——ひかえめに言っても——まるで12歳の少女のようにおびえた顔をしていた。

担当する美容師やスタイリストには事前に知らせてあるが、店内にいる他の客たちは、その8人のベイビーがスカートの中に隠している秘密を知らないのだ。

もちろん、現実の女の子は、ヘアアイロンを見て震えたりはしないだろう。挑戦者たちがその身震いを必死で抑えているところで、ここでするのが、髪やメイクだけでなく、ファッションなどm含めたトータルコーディネイトであることが告げられた。

「ごらんのみなさんの中には、私が大

変な仕事を引き受けたと思う方がいらっしやるかもしれませんね。でも、私にとっては、そんなにむずかしいことじゃありませんでした」

そう語るのは、番組のファッションコンサルタントでもあるこのサロンのチーフ・スタイリスト、ロリー・ペリーだ。

「たとえば、あなたのご主人を3時間、私に預けてくだされば、夏にビキニが似合うようなすてきな女の子にしてみせますよ。以前、ジョニー・ノックスビルをジェシカ・シンプソンに変えてみせたの、ご存じでしょ(※)。あれに比べたら、今回はずっとラクでした」

(※訳注 ノックスビルもシンプソンも、かつて同時期にMTVのバラエティ番組のMCをしていた 実際に、番組の枠を超えた「パロディ」か「ドッキリ」でもあったのだろう)

まず最初にロリーの前にやってきたのは、友人のジェナに伴われたクリスだ。

「クリスの問題は、なにより長年鍛えてきたことによる肩幅の広さと胸板の厚さでしょうね。それに、挑戦者の中で身長もいちばんありますから、いかに小さく見せるかに神経を使いました。いろいろ着替えてもらった末、ジェナと私は、カシミアのセーターとおそろいのスカートをすすめました。クリス自身は、スポーツシューズをハイヒールに履き替えるのに気が進まない様子でしたが、ちょっと練習しただけで、すぐに歩くコツを会得したのはさすがですね」

服が決まったところで、クリスは鏡の前に座らされる。

「クリスの髪は、6ヵ月間、ただ伸ばしっぱなしにしていただけで、手入れ

もほとんどしていませんでした。でも、切りそろえてトリートメントするだけで、ティラ・バンクス(※)ばりのつやのあるセミロングになりました。ヒゲの電気分解については、ずいぶん抵抗しましたが、ジェナが、ヒゲ面が好きでない女性が多いんだと説得してくれました」

(※訳注 アメリカのトップモデル)

母親のレアとともに2番目のブリアナが現れたとき、クリスはまだマニキュアが乾くのを待っているところだった。それで、ブリアナの変身の過程を目撃することになった。

「ブリアナって、寮でもいつもおとなしくて無口だから、自分の服について、母親やロリーの言いなりになっていることには、べつに驚かなかったわ。それより、その母親とロリーが選んだ服

の方に、ちょっとびっくりしちやった。肩先がのぞくオフショルダーのセーター、わざとらしいくらいのポニーテール、耳たぶからぶら下がった大きなイヤリング……あっ、あたしたちみんなピアスをあけさせられてるのね……、とにかく、まるで80年代のミュージックビデオから飛び出してきたみたいな格好なの。でも、どういうわけかそれが、よく似合うのよ。ブリアナって、本の虫の頭でっかちだけど、脳天気な女の子になることで、人生の楽しさを見つけるかもね」

ブリアナの母親は「娘」のためにワックス脱毛も注文し、二人で個室に入っていたので、次に待っていたカーラの番になった。

「カーラは、全員の中で、いちばんスレンダーでしょ」

ロリーが解説する。

「だから、せっかくの細いウエストを強調したかったんですね。それに、アウトドアって個性も生かしたいし、思い切ってデイジー・デューク (※) ってイメージでまとめてみたんです。カットオフジーンズとサンダルで、陽に焼けたすらりとした脚が印象的でしょ」

(※訳注 ‘Daisy Duke’ アメリカのテレビドラマ ‘The Dukes of Hazzard’ の登場人物 主人公二人のいところでセックスシンボルの存在へソ出しシャツと脚のつけ根くらいまでしかないショートジーンズがトレードマーク)

カーラの妹のエイミーは、最初それに賛成ではなかったようだが、そのできあがりを見てはしゃいだ。

「見て見て、あれ、私のお兄……じゃなかった……お姉ちゃんよ。ね、かわいいでしょ。うふ、へそピーまでしてるんだもん。これでママもきつと、私

にも許してくれるわね」

エイミーが、他の客たちにそんなふうに自慢しているとき、スターの卵、ディーナが入ってきた。

「ディーナは、いちばんやりやすかったですね」

ロリーは言う。

「野心を持った女優ってみんなそうですけど、ディーナも、メイクや着付けに熱心で。あれだけ積極的なら、彼女が優勝をさらっても、おかしくないと感じました。それで私は、彼女が夢見ているだろうハリウッドの受賞パーティをイメージして、ノースリーブの黒いドレスをコーディネートしたんです。メイクやヘアも含めて、予定していた時間よりだいぶ早く終わったんで、いっしょにいた奥さんのレベッカにも、同じコーディネートをしてあげ

ました。ほら、二人並ぶと、まるで双子って感じでしょ」

「チーム・フォックス」の寮母、スザンヌがやってきて、メンバーたちをシャンパンブランチに連れ出すと、今度は、「チーム・キティ」メンバーが順次やってくる。

ニッキはまず、エステのメニューを受けるように言われ、それに反発した。「ニッキには本当に困らせられました。お店の中であんなふうにゴネられたら、他のお客様にご迷惑だし、それに、なにより正体がばれちゃうでしょ。もう、あきらめて叩き出すしかないと思ったんですが、そこで、恋人のキアが負債のこととかを持ち出して、『これはあなたに残された最後のチャンスなのよ』って。それで、なんとかおとな

しくなりましたけど、あれこれやってる間、ずっとぶすっとして……。私は、彼女に選んであげたホルターネックのトップスとか、チェリーレッドのリップグロスとかか、まったく無駄になるんじゃないかって感じました。外見よりなにより、あの性格を直さないよね」

最年少のタミーは、妙に陽気に振る舞っている。

「タミーは冗談ばかり言ってましたけど、私の目には、本当にリラックスしているようには見えなかったわ」

いっしょにいた友人のサラは、そう証言する。

「お店の人が選んでくれたギンガムチェックのワンピースや、おしゃれな感じのお下げ髪を、タミーは気に入ってたみたいですね。……えっ、私？ 私は、あんな格好なんて、絶対できない

から……。ネブラスカ生まれですし……。……え、ええ、もちろんタミーはかわいかったわ。……どうか、国の人たちが、このこと、忘れててくれますように、アーメン……い、いえ、なんでもないです」

ラモナは、ひとことの文句も言わず、ロリーの提案を受け入れた。

「あたし、脚の……脱毛？……とか、ヒゲの……なんて言いましたか？……そう、電気分解？……とか、ぜんぜん平気。あたし、ヒスパニックね。仲間には、このくらい薄い人、いくらでもいます。(※) この派手な赤いドレスも……お金できたら、こんなの、買いたい。もちろん、彼女に。あたしが着てるの見てるだけで、彼女、嬉しそうでした」

(※訳注 実際になんのかはともなく、「体毛

が薄い」は、アメリカ人がメキシコ人をからかうときの常套句)

ビューティサロンに最後にやってきたのは、パンクロック娘、ティラーだった。

「じつは、ティラーの相手をしている時が、いちばん楽しかったんです」

ロリーはそう言う。

「常識にとらわれないっていうか、他の人たちが敬遠するような服でも、喜んで着てくれたから。網タイツ、ミニのレザースカート、脱色したチビT、デニムのジャケット……ふだん、うちの店に来るお客さんにはぜったいお勧めできないようなコーディネートでしょ。だから、私も楽しませてもらいました。それがまた、彼女にはよく似合うんです。モヒカンふうのカットを頼まれた時には、ちょっとびっくりしま

したけど、ピンクに染めたら、ほら、かわいいでしょ」

さらにロリーは、こうつけ加える。「彼女といっしょに来た友だちのジェフは、なんだか手持ちぶさたそうでした。もちろん、私も、彼にアドバイスを求めようとは思いませんでしたし。でも、そのうち、なんだか妙に落ち着かない感じになっってきて……。顔を真っ赤にしたりして。そんな様子に、うちのスタッフたちも気が散るっていうんで、結局、お隣のコンピュータショップに行ってもらいました。彼、いったいなんで、あんなに動揺してたのかしら？」

ビューティーサロンでのコーディネイトをすませたあと、彼女たちはそれぞれの後見人たちと別れを告げ、街の中に散っていった。

「あの子たちは、テレビ局に行く時とか以外、何ヵ月間も寮の中に閉じこめられてたわけだから……」

ルペが語る。

「この日は、久しぶりに、羽根を伸ばしたんじゃないかしら」

カーラとクリスは、連れだってジムに出かけ、午後いっぱい、トレーニングやバスケットボールに費やした。「二人でワン・オン・ワンをやったの」

カーラが言う。

「楽しかったわ。スポーツブラはちょっと気になったけどね。でも、着けててよかった。しばらくして気がついたら、コートの上まわりに20人くらいの男が立ってて、こっちを見てたの。みんな、ゲームを見てるような顔してたけど、あの目つきは、ぜったいそうじゃ

なかったと思う」

「そうね」

クリスが、うなずいてつづける。

「そのあと、二人でサウナにも入ったのよ。気持ちよかったわ。もちろん、タオルをここんところから巻いてね。でも、真っ裸で入ってくる女の人ってけっこう多いのね。ちょっと驚いちゃった。シャワーを使う時だけは気を使ったけど、気づかれてる様子もなくて、リラックスできたわ」

ブリアナは、あるコーヒーショップに入り、この間、読めなかった本を、まとめて読んだ。

「ええ、充実した時間が過ごせたわ。でも、女の子が一人でそんなことすると、男はみんな、ナンパされたがってるんだと思うみたいね。まあ、おかげで、コーヒー代は払わなくてすんだ

けど」

ディーナは日焼けサロンに行った。「ブラをとろうかどうしようか迷ったんだけど、まだ、大きくなったばかりで、乳首が敏感なの。だから、ビキニの日焼けあとができちゃった」

ティラーは、タミーとラモナをクラブに連れて行き、カクテルとショーをおごった。生まれ故郷にはこんな所のないタミーとラモナにとって、それは初めての経験だった。

「二人とも、ほんと、大酒飲みなの」

ティラーはそう言って笑う。

「でも、そのおかげで、男たちの目が彼女たちに集中して、あたしは助かったんだけど」

ただ一人、ニッキだけは、このフリ

ータイムを楽しめなかったようだ。

「ファッ(Pー)！ ただビールを飲みたかっただけなのに、にやけた男が次から次へと……。あた……。俺は、ホモじゃねえ！ ファ(Pー)！」

その夜、街から帰っ来た8人の美女を待っていたのは、驚くべき知らせだった。

「チーム・キティ」の集会室に集められたメンバーの前で、ウォルター・フリーマンという医師が紹介され、彼の口から、次のエストロゲン・チャレンジの内容が伝えられた。

「エストロゲンのおかげで、みなさんの体は、女性らしい曲線でふちどられました。しかし、残念なことに、みなさんの胸は、ほぼAカップの段階でとどまっています。そこで、明日から2

日の間に、順次、私の病院に来て、診察を受けていただきたいと思います。そこで、みなさんのバストに挿入するインプラントの量を決めることになります。まあ、選択肢はCカップ以上しかないわけですが。もちろん、この手術を断ることはできますが、その場合は、今後の挑戦権を失うことになるそうです」

【第3回放送】

(プロデューサー注：この回の収録は、挑戦者たちの術後の回復を待ち、第2回放送分の1ヵ月後に行われた。)

「私が、彼女たちの手術をすすんでやったと思いますか？」

番組の公認外科医、ドクター・フリーマンは、こう切りだす。

「私は、こんな馬鹿な試みはうまくいくわけがないと思ってたんです。たしかに、番組終了後、再手術でインプラントを取り除くことはできる。でも、その手術代は保障しないというんですよ。とりたかったら自費でとれと。つまり、お金がなかったら、一生、大きなおっぱいで生きていかなきゃならないんです。だから、診察時にそれを説明すれば、みんな降りるだろうと思っ

ていた。ところがどうです。誰ひとりとして手術を拒む者はいなかった。みんな今や、以前にも増して豊かなバストになってますよ。クリスについては、野球への復帰も考慮してスタッフと相談してBカップにとどめました。ディーナは逆に、自分の方からDカップにしてくれと言ってきましたからそうしましたが、それ以外はみんなCカップです」

そこで、ドクターフリーマンは表情を変え、カメラに向かって語りかける。「テレビをご覧のすべての女性のみなさん、豊胸手術は、みなさんが考えていらっしゃるよりずっと安くて安全です。ご用命は、ぜひ当院で。なお、受付でこの番組を見たと言ってくださいれば、2つ分のお値段で4つ分の手術をサービスします。あなただけでなく、ご主人にもぜひ、乳房を持つ悦びを教

えてあげてください」

8人のヤングレディたちが、もはや簡単には後戻りできないところまで行ってしまった今、その姿を、もう一度スタジオの観客たちの前で披露しようという計画が立てられた。

ただ見せるだけでなく、彼女たちが女としてどれだけ魅力的かを測るため、そのプレゼンに、歌やダンスの要素を取り入れることが決まった。挑戦者たちが、それぞれの後見人のコーチのもと、ステージパフォーマンスをすることになったのだ。

そのあと、審査員たちにお気に入りの女の子を投票してもらうことも決まった。それぞれのチームで票が最も少なかった者1名ずつが、自動的に番組を去るのだ。

ショーは、クリスによる「ビー・トゥルー・トゥ・ユア・スクール」(※)の演目でスタートする。

(※訳注 ‘Be True to Your School’ ビーチボーイズのヒット曲、前奏と間奏に、チアリーダーのかけ声が入る)

その曲にふさわしく、クリスは、ひいきのフットボールチーム、シカゴ・ベアーズのチアリーダーユニフォームを身につけていた。そのパフォーマンスは、細部まで完璧で、彼女が足を上げた時、ちらりと見えたパンティまで、ベアーズカラーだったことに、観客たちは歓声を上げた。そのすらりとした脚とつんと上を向いた胸は、本物のベアーズからスカウトされたとしてもなんの不思議もないものだ。

「自分の経験から言っても、チアリーダーって……その、つまり……男たちのなにかを勇気づけるためのものでし

よ。そのつもりで踊ったの」

クリスは、そう語る。

「とは言っても、練習方法もテクニックも衣装もよくわからないから、ジェナの力をずいぶん借りたわ。音楽からこのミニスカートまで、全部、彼女が選んでくれたの」

もし、クリスをBカップにしたことでインプラントが節約できなかったのなら、ドクター・フリーマンは、ディーナに割増料金を請求したにちがいない。それほど、そのDカップの胸は、効果満点だった。

ハスキーボイスで歌うディーナの「ブラック・ベルベット」以上に、ストラップレスのブラック・ベルベットからのぞく胸の谷間は、観客の目を惹きつけた。

……どうだ、見たか、映画の都よ！

「そうなの。ハリウッドじゃあ、中途半端な成功に満足してるようじゃあ生き残れないの。いつも、ビッグをめざさなきゃあ」

ディーナはまくし立てるように言う。

「だから、あたしは、みんなよりビッグにしてもらったのよ。ううん、冗談言ってるんじゃないの。ハリウッドのプロデューサーたちに、あたしが、役をとるためなら、どんなことだってするってところを見せたかったの。それにね、他にも、この方が都合がいいことがあるのよ。レベッカもDカップなの。夫婦でブラを共有できるでしょ」

ブリアナがステージに上がっている間、観客たちは眠気をこらえていたようだ。彼女は、本の虫キャラから飛び出す気はなかったらしく、ベートーベ

ンのピアノコンチェルトを演奏したのだ。その衣装も、背中が大きく開いているとはいえ、コンサバティブなイブニングドレス。他の挑戦者たちがきわどさを競っているのとは大違いだ。ただ、本物の美人の場合、そんな衣装の方がむしろ魅力的に映ることも、ままあることだ。

ブリアナは、自分のパフォーマンスについて、弁明はしなかった。

「最初は、てかてかのレオタードで『ホイップ・イット・イントゥ・シェープ』でも歌おうかと思ったの。でも、やっぱり、それはちがう気がして……。ピアノなら子供の頃からやってて得意だし。観客のウケはイマイチだったかもしれないけど、あたらしい女の子らしさを見せたつもりなのよ。ここまで来て落とされたくはないけど、あたしには、これ以上ムリ」

ブリアナはきまじめに考えたのだろうが、そのまじめさは、チーム・フォックスの最後のメンバーには受け継がれなかった。カーラが歌って喝采を浴びた「花のサンフランシスコ」は、ある意味たしかにクラシックだが、ウケた理由はその曲ではない。彼女が着たフリンジつきのホルターネックからは、ドクター・フリーマンの技術的成果がいかに顔をのぞかせていた。さらに、短いホットパンツからは、彼女自身の努力の成果でもあるナマ脚が、余すところなく露出していた。

「みんな、あたしのことを遅れて来たヒッピーだとか言うけど、そんなことないわよ」

カーラは主張する。

「だって、脚も脇の下も、ちゃんと処理してるもの(※)」

(※訳注 「自然回帰」を主張したヒッピーには、腋毛などを剃らない女性が多かった)

脱落したくないという思いの結果ではあるにしろ、つづくチーム・キティのメンバーも、ウケ狙いのパフォーマンスが中心だ。

後半は、タミーの「ストロベリー・ワイン」ソウルバージョンでスタートする。その衣装は、裾を胸の下で結んでウエストを露出したシャツと、カットオフジーンズ。これがオンエアされれば、国じゅうのカントリーボーイが、タミーを納屋の屋根裏に連れ込みたいと思うにちがいない。

「これまで、人前で歌ったことなんてなかったの。高校の文化祭で歌おうと思ったんだけど、パパが、そんな女々しいことはするなって。でも、今は平気よね。女の子なんだから」

観客の歓声は、ラモナがステージに上がったところで、ブーイングに変わった。彼女が着ていたのが、全身を真っ黒に覆うマリアッチの男物衣装だったからだ。おまけに、ソンブレロを目深にかぶり、ヒゲまでつけていた。

しかし、バンドが「メキシカン・ハット・ダンス」を演奏しはじめたところで、ブーイングはやんだ。その衣装がさっとはぎ取られたのだ。下から現れたのは、スパンコールのシャツ。さらに、その衿が大きく開き、シークインのビキニトップが大胆に見えている。ソンブレロが客席に向かって投げられると、その下からは、つややかな黒髪が流れ落ちた。最後につけヒゲをとると、そこには、どんな男も気をそそられるセニョリータが、マラカスを振りながら踊っていた。

「1年前、あたし、カリフォルニアで、1日10ドルでフルーツ摘んでました。今、テレビで、男たちのためにストリップしてます。さすがアメリカ」

ラモナが引き起こした観客たちの体のほてりは、冷たいシャワーで冷ませるだろうが、つづくニッキが起こしたそれは、もはや消防ホースで消し止めるしかない大火事だった。ステージ上に現れたその姿は、ゴールドのボクサーパンツと、二つのふさ飾りだけ。

そんな格好で腰をくねられながら踊るエロティックなダンスは、観客以上に、テレビコードの検閲係を落ち着かなくさせた。

ただ惜しむらくは、そのダンスは扇情的なだけで、けっして洗練されものでなかった。要するに、練習不足は見え見えだったのだ。

せっかくのプロポーションを見せながら、その動きはどこか投げやりで、熱意のこもったものではない。

「何度も、しっかり練習しろって言ったのよ」

ニッキの恋人、キアはため息まじりに言う。

「でも、あの手術のあと、すっかりふさぎ込んでしまって。私はもう、面倒見切れないわ。いくらせつつかれたって、胸の除去手術のお金を出す気なんてないしね。それに、自分にも大きいのがあるんだから、もう、私のおっばいに執着する必要もないでしょうし」

7人のパフォーマンスが終わり、トリを努めるのはティラーだが、彼女は何の緊張もしていないようだ。

友人のジェフとともにステージに上がったティラーは、ベースギターを弾

きながら、ハードロックバージョンの「シーズ・ザ・レディ」をシャウトした。途中、1番が終わって間奏に入ったあたりで、どうしたわけか、彼女の小さなビキニトップが「はずれた」。

ティラーは、楽器を抱きかかえ、それで隠して演奏をつづけたのだが、その一瞬、観客たちはしっかりと、そこに揺れていた2つのものを、目に焼きつけていた。

「あたしは、まちがいなくパスするでしょ。ね」

ティラーは自信満々に言う。
「……えっ？ あのこと？ そりゃあ、あんな思いして手術までしたんだもん、使わなきゃ損じゃない。でも、ジェフには先に言っという方がよかったかな。彼ったら、驚いてギター落とすんだもん。あんな格好で弾きながら、ベースでリードギターのフレーズまで

カバーするの大変だったのよ」

投票が集計され、誰と誰が脱落するのかわかっていたのだが、その結果発表は週末まで持ち越された。誰がいなくなるにせよ、別れを惜しむ時間をつくるためだ。

ところがその週は、それとは別の、悲劇と言っていい出来事で幕を開けた。

タミーの父親が、何の前触れもなくやって来たのだ。

「その時、タミーとあたしは、寮の前庭で日光浴していたの」

ティラーが、証言する。

「ちょうど、彼女の着けてるビキニがすてきだってほめてる時だったわ。恐い顔した田舎っぽいおじさんが、タミーの方じっとをにらんでるのに気がつ

いたの。そんなあたしの視線に、タミーもそちらを見た。その瞬間の彼女のおびえた顔で、それがタミーのお父さんだってこと、すぐにピンと来たわ」

「パパは、すごい勢いで駆けてきた」

タミー自身が、思い出すようにつぶける。

「あたしには、Tシャツでビキニを隠す時間さえなかった。近くまで来たパパは、こちらをにらみながら、大声でなじった……『クソ野郎』『へたれ』『おとこおんな』『オカマ』『ホモ』……実の父親がよ」

気持ちを落ち着かせるように、しばらく沈黙したあと、タミーはつぶけた。

「パパは、あたしのことを、町の面汚しだって言ったわ。こんな息子を持ったことが恥ずかしいって。あたしは、もう18なんだから、自分の道は自分で決めるって言おうとしたの。でも、そ

んなことと言えば殴られると思って言えなかった。パパは、あたしを連れて帰ろうとした。『帰ったらすぐに、その乳を切り取ってやる』って。で、あたしを軍隊に入れるつもりだって言うの。あたしを、パパみたいな、無神経で下卑た男に変えるためによ」

タミーは、父の腕を振り払って、それを拒否した。すると、逆上した父は、タミーの体を乱暴につかみ、トラックに向かって引っ張っていかうとした。

そこにいっしょにいたのがティラーだったことは、運がよかった。彼女は、ロックミュージシャンという経歴の中で、音楽以外に、もうひとつのことを学んでいた。暴力的な攻撃に対処する方法だ。

「熱くなってる相手って、意外と簡単なのよ」

ティラーは、こともなげに言う。

「そりゃあ、友だちのお父さんをそんな目にあわせたくなかったわ。でも、目の前でやられてるのは、友だち以上の人、同じ寮で暮らす姉妹みたいな人なのよ。結局、彼は、泡を吹きながらトラックの運転席に駆け込んだわ。女にやられたのがよっほど悔しかったんでしょね。車を出しながらも、まだ、タミーに向かって毒づいてた。『勘当だ。二度と帰ってくるな』って。でも、あたしがつらかったのは、その言葉に、タミーが泣いてたこと。気づいて寮から飛び出してきたラモナが、タミーを抱きかかえて部屋まで連れて行ってくれた。あたしが彼女の友だちのサラに電話してる間も、ずっと見ててくれたわ。そのあと、あたしたちはみんな、ラモナの部屋で、タミーをなぐさめつづけたの。ニッキだけは、相変わらず、自分の部屋に閉じこもってたけどね」

1時間もしないうちに、サラも駆けつけた。

「私が行ったときにはもう、タミーは泣いてなかったけど、二度と笑わないんじゃないかって顔してたわ。私はずっと恐れていたことが、現実になってしまったのね。番組の2回目の収録のあと、私は一度、トゥーリバーに帰ったんだけど、タミーに対する非難は、前以上にひどくなってたわ。私は、タミーの勇気は、むしろ尊敬すべきことなんじゃないかって話してまわったの。町の人たちは、そんな私もあざ笑った。今後、タミーが、いつ、どんなふうに帰ったとしても、その姿を見たとたん、町の人たちは、『ホモ』ってあざけて、たたきのめすでしょうね。……実は私、ネブラスカ大学に合格して、この秋から寮に入るの。同じ州だ

としても、トゥーリバーよりずっとましよ。あたしも、もう、あの町には二度と帰る気なんてないわ」

涙に暮れた夜は、たくさんの抱擁と、ぼそぼそとした会話の中で過ぎていき、夜が明ける頃には、タミーも、未来に向かう勇気を取り戻していた。

「あたしの気持ちをわかってくれる人は、家族の中にもいなかったし、サラ以外、友だちの中にもいなかった。でも、ここにはいる。ここの女の子たちがあたしの家族、あたしの本当の姉妹よ」

（プロデューサー注：寮で起こる出来事はすべて放送の素材として使用できるという契約を、彼女たち全員と結んでいるとはいえ、このタミーと父親の一件については放送をためらった。しかし、そう伝えたスタッフに対し、タ

ミーの側から、自分には恥ずべきことはなにもないから、ぜひ放送してくれという申し出があった。)

そんな出来事のあと、問題の金曜日はすぐにやってきた。誰が脱落するのかを聞くために、8人の女の子全員が、チーム・キティの集会室に集められた。

「こんな気の重いことって、初めてよ」
そう言うのはディーナだ。

「自分が落とされるんじゃないかっていう恐怖もあるけど、それは、他の子が落とされるにしてもおんなじ。姉妹がいなくなるって感じだもん。もう、番組のことなんてどうでもいいから、誰もいなくならないでほしいって気がしてたわ」

投票の結果は、すでに出ていた。

8人のうち、7人の票は競っていた。

そして、1人だけが、そこからかけ離れた票しか獲得できなかった。

まず、その1人が発表された。

大方の予想どおり、それはニッキだった。

「ニッキ、美人。でも、それ以上のこと、しなかった」

そう言うのは、ラモナだ。

「あんなきれいな体とかわいい顔あるのに、もったいない。その気なら、もっと長くいられたのに。でも、たぶん、ニッキ、自分で逃げたがってた。だから、あたし、悲しくない」

ニッキは、荷物をまとめ、姉妹たちにさよならを言って去っていった。

「その夜遅く、ニッキは、女物の服のつまったスーツケースだけを持って、私のホテルに現れたの」

恋人のキアは言う。

「で、いつにない素直さで、助けてくれって。男物の服を買ってほしい、胸の除去手術の費用を出してほしい、そして、いっしょに帰ろう……。結局、私は、その願いをきいてしまうことになるのかもしれない。だけど……」

一人目の脱落者は、ある意味、誰もが納得のいくものだったが、チーム・フォックスの方には、努力が足りないことを責められるようなメンバーはいなかった。

寮母のスザンヌは、沈んだ顔で、重い口を開いた。

「ごめんね、カーラ。ほんとに接戦だったの。僅差で、あなたがこぼれてしまったの」

その言葉と同時に、カーラの三人の姉妹たちが泣きだした。チーム・キティの三人の目にも、涙がにじんだ。

ただ、カーラだけは、なんとか持ちこたえていた。

「落ち込んでない……なんて言ったらウソになるわね。せめて、胸を入れる前に落としてくれてたらって、思うもの。でも、悔やんでなんかいないわ。この番組に出たことで、ほんとの友だちがいっぱいできたもの。それに、妹のエイミーとも前以上に仲良くなれたしね。そうなの、エイミーと二人で、のんびり旅しながら帰ることにしたの。1ヵ月くらいかけて、姉と妹としての旅行を楽しむつもり。サンフランシスコに着いたら、どこかで手術費用を借りてカールに戻るわ。元気でね、みんな。放送が始まったら、最後まで必ず見るからね」

残された女の子たちに、去っていったチームメイトを思って悲しむ時間

は、あまり与えられなかった。

すぐに、次のエストロゲン・チャレンジの内容が告げられたのだ。

「いい？ 聞いて」

ルペが呼びかけた。

「明日、みんなである場所へ出かけます。それは……タトゥ・パーラー。どんなタトゥを入れたいか、今夜のうちに決めておいて。ハート、お花、蝶々……選択は、それぞれに任せるわ」

【第4回放送】

「ああ、そりゃ痛いさ」

番組の公認タトゥ・アーティスト、マーク・デラクロイスが言う。

「でも、それに耐えれば、君は、一生のデザインを手に入れられるんだよ」

マークは、挑戦者ひとりひとりに、やさしくていねいに対応していた。死ぬまで肌の上に残る印として、どんな女の子っぽいアートがいいのか、親切に相談にのってくれるのだ。

じつは、この時点で、マークはまだ、レディたちの秘密を知らなかった。リアリティTVの撮影であることは聞いていたが、それがどんなものなのか、詳しく知らされていないのだ。

最初に針を打たれる勇気を持ったのは、心も体も鍛え抜いたアスリート、

クリスだ。

「べつに、どうってことなかったわ。あたしの焼けた肌だと、ふつうに入れてもあんまり引き立たないでしょ。だから、片方の二の腕のまわりと、反対側の足首のまわりに、ぐるっとお花のチェーンを入れてもらったの。これで、もう、優勝するしかなくなっちゃったわね。だって、タトゥを消すには、とんでもなくお金がかかるんでしょ。これをしたままじゃあ、野球部のロッカールームで言い訳できないもん」

うってかわってブリアナは、自分自身がアートの素材になることに、気が進まない様子だ。

「昔から、注射だって怖いんだもん。弱虫って言われるかもしれないけど…」

結局、クリスとディーナに両手を握

ってもらって、ブリアナは、マークの前に座った。そして、背中 of ウエストあたりに大きく、足首に小さく、蝶のタトゥを入れてもらった。

「あれ、チビTの下からのぞかせてたりすると、かわいいんだ。彼女によく似合うと思うよ」

マークが言う。

「それにしても、ブリアナって、本当に堅物だよ。鼻やへそのピアスをすすめても、今はその気はないって、まったく取り合おうとしないんだ」

スターの卵、ディーナは、タトゥを入れることでオーディションのチャンスが減ることが心配なようだ。

「そりゃ、時には、その方がいい役もあるけど、できる役が限られるのはたしかでしょ。だからあたしは、肩のところに、茎の長いバラを入れてもらっ

たの。腕を出せばセクシーで、半袖を着れば目立たなくなるの」

チーム・フォックスが痛みを癒している間に、チーム・キティの三人も、自らの体をキャンバスとして差し出した。

まず、最初はタミーだ。

「どうせやるなら、徹底的にやろうって気になったの。故郷の町の連中が、あたしのこと、男じゃないって言んうなら、あたしが何なのか、はっきりさせてやろうって」

タミーの背中には、タテ3インチ(約7.5センチ)、ヨコは左右の肩胛骨にかかる長さで、「PRINCESS」の文字が彫り込まれた。

ラモナは、いつもどおり慎み深かった。

「女っぽいタトゥ入れろと言われてました。だから、あたし、アイライン。ね、女っぽいです。ちがいますか？」

タトゥ職人マークも、それに賛成してくれたようだ。

「誰にでも勧めるってわけじゃないけど、たしかに、ラモナには似合うと思うな。これで、アイメイクの手間が省けるよ。深くて、印象的な目になるはずさ」

最後に、ティラーがマークの前に座った。

すぐさま、二の腕に入れてくれと頼んだのは、名前のスペースを残したピンクのバレンタインハート。

……誰の名前？

「もちろん、特別な人よ」

若いミュージシャンは、そう言ってくすっと笑った。

ティラーの後処理をすませ、包帯を巻いたところで、マークはスタッフに呼ばれ、初めて今の女の子たちの正体を明かされた。

とたんに彼は、顔色を変えた。

「どうして先に教えてくれなかったんだ？ 知ってたら、あんな女っぽい凶柄なんて選ばなかったのに。いいか、タトゥっていうのは一生もんだよ。そんな馬鹿馬鹿しいコンテストのために、あんなことしちゃって……。彼女……彼らは、ぜったい後悔するよ」

そこで、それぞれの女の子たちが、すでに豊胸手術まで受けたことを教えられ、マークはやっと少し冷静になったようだ。

「ほんとにみんな男なの？ あのブリアナも？ まったく……。考えてもみなかったよ」

彼女たちが、自分の体をアートに捧げたことで、今週の試練は終わったと思ったのなら、それはイタく間違っていた。

「タトゥは、彼女たちを安心させるためのフェイクだったの」

寮母のルペは笑いながら言う。

「ほんとのチャレンジは、これから始まるのよ。……ふふ」

金曜日の夜、どちらのチームの女の子たちも、夜の街に出かけるから、おめかししろと言われた。気取りすぎず、かといってカジュアルになりすぎない、そんなおしゃれが条件だという。

どちらの寮のバスルームも、すぐに三人の女の子で満たされ、わいわいがやがやと、シャワーや、ヘアセットや、メイクが進んだ。

「おしゃれのデキで、次に落ちる人が決まるってことかしら？」

ディーナが首をかしげながら言う。「だとしたら、手を抜きちゃまずいわよね。ねえ、クリス、あなたの持つてるフープイヤリング、貸してくれない？」

身繕いが終わったところで、どちらのチームも、それぞれの居間で待たされた。

恐いようなワクワクするような、なんだか不思議な予感の中で、彼女たちは、自分たちがどこに連れて行かれて品評されるのか、思いをめぐらせた。

ダンスクラブだろうか？ おしゃれなレストランだろうか？ それとも、もっとずっと面白いどこか……なにか？

「ねえ、お嬢さんたち」

入ってきたルペが、ティラーとラモナとタミーに呼びかける。

「金曜の夜なのよ。あなたたちみたいなかわいい女の子が、ひとりでいるなんて、おかしいと思わない？」

その言葉に、タミーが息を呑んだ。これから始まろうとしていることの見当がついたのだ。

「だからね、今夜、あなたたちを夜の街へエスコートしてくれる男性を、それぞれ用意したの。もうじき、最初の人がここへ来るはずよ。いい？ 覚えておいて。男って、女の子のことを意外とわかってないものよ。特に、あなたたちがどんなふうにならぬ女の子として育ててきたかをね。だから、お里が知れるようなことしちゃ、だめよ。それと、もうひとつ。かしこい女の子がファーストデートで許していいのは、キスマ

でよ。それ以上でも……それ以下でもなく、ね」

「本当のことを言えば、相手を頼んだ男性たちには、事前に彼女たちの正体を知らせてありました」

プロデューサーのファン・ベナダが言う。

「実際の話、そうしなければ、訴訟沙汰にもなりかねませんからね。でも、挑戦者たちはそれを知らない。当然、その男性たちの前で、女の子になりきろうとするわけです。彼女たちが、その役をどれほどうまくこなすか。みなさんは、ご覧になって驚くはずですよ」

「こっこのチームで、最初にやってきたのは、あたしの相手だったの」

クリスが、ちょっと情けない口調で言う。

「顔を合わせて10秒もしないうちに、あたしは、デートに連れ出されてたわ。最悪だったのは、その男が、大学野球の選手だったってこと。おまけに、あたしは、彼……ダーネルと、一度対戦してるの。幸い、ダーネルの方は、目の前のクリスが女の子だと信じてるから、そこまで気がまわらなかつたみたいだけど……」

ダーネルがどこかで食事しようと誘ったのに対し、クリスは、スポーツバーを提案した。

「ずいぶん男っぽいこと言うんだね。でも、その方がいいか。白状すれば、もし女の子が、最初のデートで『最後の線』までに行きたそうにしたら、僕はもう、結婚のことまで考えちゃうよ」

スポーツバーは、たしかにヒットだったようだ。二人にとって居心地のいい雰囲気、会話が弾み、野球への愛

以外にも共通の趣味が多いことも発見できたのだ。

「クリスと僕は、馬が合うみたいだ」
デート後のダーネルへのインタビューが挿入される。

「でも、やつは、昨シーズン、僕を二塁でタッチアウトにしたこと、覚えてたのかな？ 今夜も、帰りの車の中で、同じことをされたよ」

ダーネルが、すきをうかがって(※)いるのに気づき、それがそんなにいやな気がしなかったので、降りがけに、クリスは軽いキスを許した。

(※訳注 原文は ‘steal second’ <秒を盗む> まさに ‘second steal’ にタッチで応えたわけだ)

「ええ、いい人だったわよ。でも、ふつうの意味でね。あたしは、やれと言われたことをやっただけだもん」

ブリアナは、自分のデートの相手が到着したとき、思わず叫びそうになった。その相手というのは、つい最近会ったばかりの人、タトゥー師、マークだったのだ。

「じつは、あたし、これが生まれて初めてのデートだったの」

ブリアナは白状する。

「笑っちゃうでしょ。21で、一度も誰かを誘ったことがないなんて。でも、あたしは、そんな自分のまぬけぶりを、デートの相手から笑われるんじゃないかって、それが恐かったの。だけど、マークには、そんな心配、いらなかったわ。すごくやさしくて、頭もいいし。話も面白くて、デートの間、ずっとあたしを飽きさせないの。その上、彼ったら、もっと、あたしのことが聞きたいって……。ほんとにすてきな人」

そこで、マークがハンサムだったか

ときかれたブリアナは、何のためらいもなくうなずいた。

「ええ」

マークはブリアナを、ある大学オーケストラの演奏会に連れて行った。プログラムは、ブリアナの大好きな交響曲だった。

演奏会が終わると、二人は、手をつないでキャンパスを歩いた。その足取りは、なぜか次第に速くなり……。二人を追っていた番組のカメラマンが照明の調節をしているすきに、彼をまいて、どこかに消えてしまった。そして、真夜中過ぎまで戻ってこなかった。

ブリアナを寮まで送り届けたところで、マークは彼女にキスした。

ファーストキス？……にしては、ちょっと……？

「マークって、ほんとにいい人。なんだか、あたしにタトゥを入れたことを

気にしてるっていうか、後悔してるみたいなの。だから、あんなにやさしく気づかってくれたんだらうけど、人からあんなふうに扱われたの、あたし、初めてだったから……。とにかく、彼って、楽しくて、やさしくて、すてきで……」

マークの方は、なぜかちょっと浮かない顔で、逆に聞き返した。

「あの……この番組の収録は、あと……？ ……2ヵ月？ いや、つまり……終わったあと、ブリアナは、彼女の好きなようにできるんだよね？ ちがう？」

そこで、ブリアナの背中の中タトゥーに話しがおよぶと、マークは、思わず口をすべらせた。

「彼女、まだ包帯したままだったから……あっ、いや……彼女がそう言ったんだ」

チームフォックスのあと一人、ディーナも、やさしい男とのデートを、それなりに楽しんだようだ。

「3年前にレベッカと結婚して以来、他の人とデートしたことなんてないのよ。だから、彼女がこれをどう思うか、ちょっと心配。……っていうか、あたしは、優勝するためにやってるわけで、それ以上なんの意味もないって、それをわかってほしいの」

ジョージは23歳のバーテンダーで、やはり、駆け出しの俳優。彼はディーナに、心が揺れるような時間を味わわせた。

「僕らは、ダンスに行ったんだ」

ジョージは言う。

「彼女は最初、ちょっとやりにくそうだったな。つい、リードしそうになるんだ。でも、しばらくすると、僕に体

を預けてきて、僕も、そんな彼女を抱きながら踊った。なんだか学生時代のダンスパーティみたいな新鮮な感じでワクワクしたよ。でも、彼女がすごく自然な感じだったんで、こっちもノレて、あの頃みたいな変な緊張感はなかったな。そのうち、彼女はきつと、主演女優賞をとるよ」

寮の前で、ディーナを車から降ろし、そこでジョージは、彼女にキスした。さらに、寮の玄関のところで、もう一度、彼女を抱きしめた。

二人はそのまま、そこで何度かキスを交わした。

「何度もキスしたのは、そうしなきゃいけないって思ったからよ。つまり、番組上、ちゃんとしたカットが必要だろうって。気持ち悪いとかは思わなかったけど、でも、けっして気持ちよかったわけじゃないわ。まあ、この3年

で初めて、他の人とキスしたわけだし……ううん、結局、演技よ。そう、すべてはお芝居！」

チーム・フォックスのメンバーが街をピンクに染めていた頃、チーム・キティの女の子たちも、じっと座っていたわけではない。

タミーは笑顔で、地方新聞の見習記者、テランスとのデートについて語る。「彼はあたしを、インディペンデント系映画の上映会に連れて行ってきて、そのあと、コーヒーショップに入ったの。それ以上誘われたら、断るための言い訳をの心の中で準備してたけど、それは使わずにすんだわ。動物のしとめ方だとかカーレースだとかじゃない話題を、男の人と話すのは新鮮だった。やっぱり、ネブラスカでは経験できない世界だから」

その楽しみは、もっぱら、彼女の心の中のものだったようだが、それでもタミーは、デートの終わりに、テランスに一瞬のキスを許した。

「タミーは、美人だったよ」

テランスは言う。

「だから、僕の方は抵抗なかったんだけど、彼女の方は、あんまり僕とのデートに熱中してるって感じてもなかったな。この番組で、彼女が優勝できるといいね」

こちらのチームで2番目に出発したのは、ラモナだった。そして、彼女が最初に帰ってきたわけでないのもたしかだ。

彼女の相手は、亡命キューバ人の写真家、アントニオだった。彼は、ラモナを公園に連れて行き、月光の下のボート遊びに誘った。池にこぎ出した二

人にぴったりついていくわけにもいかず、カメラマンは、岸から望遠レンズで狙ったのだが、それでも、ボート上で二人が手をつないでいるのが、はっきりと画面にとらえられた。

「これ、浮気じゃない……ですね？」

ラモナは、そう聞き返す。

「あたしの恋人、ピラルだけ。あの小さなボートで、あの人とキスしたけど、彼、男。だから、別の話。ちがう？」

じつは、すべての女の子がブラインドデートに出かけたわけではない。

スタッフは、少なくとも挑戦者のうち一人は、友人とデートした方が面白いと考えた。

ティラーの相手が現れたとき、彼女は、驚きの声をあげた。

「ジェフ！」

ジェフは言う。

「ティラーが、この前の投票で高得点だったって聞いて、喜んでたんだ。でも、俺とデートしないと落とされるとか言われて……。くそっ！ やつと俺とは、お互いの妹とつき合ってたことだってあるんだぜ。なのに……。なんでやつのが、妹よりかわいいんだ!？」

昔からの知り合いでバンド仲間でもある友人をエスコートしながら、ジェフはまるで、初めてデートする13歳の少年のようにおたおたしていた。

「たしかに彼は、落ち着かない感じだったわね。もしかしたら、このまま倒れるんじゃないかって思ったくらいだもん」

ティラーは、くすっと笑いながら言う。

「なんか、かわいいの。どうしたらいいのかわかんない感じで。だから、あたしの方からクラブに誘っ

たの。カクテルを注文したのもあたし。もちろん、彼はあたしと踊ろうとしなかったけど、でも、他の男があたしを誘いに来ると、けんか腰で追い払うのよ。考えてみれば、すごいジェントルマンってこと？ ……ふふ」

ティラーを送り届けた寮の玄関で、その目を見つめたジェフは、まるで車の前に飛び出した鹿のように体をこわばらせていた。しかし、やがて、ゆっくりとその唇を近づけていった。

「親友とキスしてるって感じじゃなかったんだ」

何かをかみしめるように、ジェフは述懐する。

「やわらかくて……、で……、すごく……よかった」

その夜は、どちらのチームの女の子たちも、遅くまで、お互いの初めての

体験、そして初めてのキスについて、くすくす笑いながらおしゃべりしていた。

しかし翌日、みんな、何かの予感で朝早く目覚めてしまった。

おそらく今日、それぞれのチームから一人ずつ、脱落者が出るのだ。

「たぶん、今度はあたしだと思うわ」
ブリアナは、ため息まじりに言う。
「これまでずっと、本の虫って感じだったでしょ。それって、求められてる女の子像とは、ずいぶんズレてたなって、今になって気づいたの」

しかし、そんなブリアナの予想ははずれた。

「ごめんね、クリス」

言いにくそうに、スザンヌは口を開

いた。

「あなたが、誰よりも努力してたのは知ってるのよ。でも、番組の審査員たちは、あなたのデートでの振る舞いが、男っぽすぎたって」

クリスはなにより、その言い方にかちんと来たようだ。

「あたしは、スポーツバーへ行って、好きなスポーツの話をしただけよ。そういうものに興味を持つと、とたんに、自立した強い女って見なされるわけね。で、自立した女は、女らしくないって？ だから、あたしは不合格？ なによ、それ。性差別そのものじゃない。あたし、男に戻っても、ぜったいに女を馬鹿にしたりしないわ」

そのあと、少し落ち着いたクリスは、友人のジェナと、帰ってからの身の振り方を相談するつもりだと言った。

そして、あとに残ることになった二

人の姉妹と抱き合い、去っていった。

その頃、チーム・キティでも、つらい別れが交わされていた。

「タミー、だめ！」

涙を隠そうともせず、ラモナが叫んだ。

「タミーには、帰るところ、ない！ あのお父さん、ひどい男。なにされるか、わからない」

ラモナも、そしてティラーも、タミーが落とされるなら、自分が代わりに降りると言ったのだが、タミーはそれを、断固として断った。

「二人とも、ここまでのすべてのことを棒に振ってもいいって言ってくれたの。タトゥも、豊胸手術も、ホルモンも……。二人には、故郷に帰っても、あたしみたいにひどい事情はないからって。あたしにとって、二人は、本当

の友達だわ。でも、だからこそあたしは、二人との友情を壊したくないって思ったの。これからどうしたらいいのかは、ぜんぜんわからないけど……。パパには勘当だって言われたし、サラは、1ヵ月うちには大学の寮に入るでしょうし……。はっきりしてるのは、あたしが、たぶん、世界でいちばん美人のホームレスになったってこと……」

そこでタミーは泣き出し、それ以上インタビューはつづけられなくなった。

挑戦者たちの数が番組当初の半数になったところで、寮母たちは、女の子たちにさらにとんでもない爆弾を投下した。

「来週のエストロゲン・チャレンジは、これまでと少しちがうのよ。あなたた

ちがここまで女性になれたことに、スタッフもちよっと驚いてるの。そこで、あなたたちを、もっと現実の世の中にお披露目してみようということになった。現実……そう、あなたたち自身の現実の中へね。来週、みなさんは、それぞれのホームタウンに帰ることになりました。そこで、親戚とか、かつての友人や同僚たちと会ってもらいます。番組の放映はまだ始まっていませんから、彼らは、あなたたちがリアリティTVのためにこうしているのだとは知らない。で、あなたたちの口からも、そのことだけは言わないでほしいの。つまり、あなたたちは彼らに、自分の意思で女になったのだと言わなければならない」

【第5回放送】

女物のつまった荷物と飛行機チケットを手に、4人のヤングレディたちは、これまでで最も身のすくむ挑戦のために故郷へと旅立った。以前の知り合いたちに、ひとりの女性を紹介しに。

「テレビ番組のために女性になっているというのなら、人々は、まあ、納得するでしょう」

プロデューサーのファン・ベナダは言う。

「でも、自分は女の子になりたかったんだというのは、まったく別の問題です」

ブリアナは、セントルイス大学の学生街に立っていた。

そのウエストを露わにしたTシャツと蝶のタトゥーは、彼女を追い越してい

く男子学生をどうしても振り向かせて
しまうようだ。

「見慣れた風景なのに、まるで知らない
ところにいるみたい……」

「女子大生」ブリアナの第一印象だ。
「みんなには、この1年間の休学を、
長い旅行だと言ってたの。こんなあた
しを見て、みんなはなんて思うんだろ
う？」

ブリアナが最初にたずねたのは「チ
ェシャー・キャット」という名のゲー
ムセンターだった。

「土曜の夜は、たいていここにいたわ。
たとえば『ダンジョンズ&ドラゴンズ』
とかに熱中してね。でも、ここって、
女が一人で来るような場所じゃないで
しょ。連れもない女の子が入ってくる
なんて、たぶん、この店始まって以
来の出来事じゃないかしら」

ブリアナが奥の部屋に入っていくと、そこにいた6人のゲーマー全員が、驚いたように見てきた。

ブリアナは最初、顔見知りの彼らが、変身した自分の姿に驚いているのかと思ったが、そうでないのはすぐわかった。彼らの表情は、明らかに、突然現れた魅力的な女性に衝撃を受けているというものだ。

ブリアナが名のり、自分がかつてドラゴン狩りの仲間だったことを納得させると、旧友たちは矢継ぎ早の質問を浴びせてきた。

「なんでそんな美人なんだ？」

「それ、ほんもの？」

「今、女の子たちといっしょに暮らしてる？ ……えっ？ その子たちも、じつはみんなもと男？ ……で？ 彼女たちの裸は見たのか？」

「それより、『新スターゲート』のDVD、

見たか？」

ブリアナは、そんな旧友たちの質問に根気よく答え、さらに、ロールプレイングゲームを何ステージかつき合わされた。

「1年前、あたしは、ここ以外での週末の過ごし方なんて知らなかったわ。でも今、この男の子たちを見て、なんでデートもしないでこんなことばかりしてるんだらうって感じてるの。もう少し服装とかに気を使えば、じゅうぶんかっこよくなれるのにつて。番組の収録が終わってこの町に戻ってきたら、この子たちに新しい服を見つくるってあげようかな。で、女の子との話し方を教えてあげるの。そうでもしないと、きっと、悲惨な人生を送ることになるわ」

部屋にWebカメラを設置してくれと

いう誘いを笑顔で断り、ブリアナは彼らに別れを告げた。

次に向かったのは、大学の心理学研究室だった。

1年間の休学を、自己啓発の旅だとはとらえていたかつての仲間たちは、あのブライアンか、こんな自己を啓発していたことに、当然ながら仰天した。

「正直なところ驚きました。私は、ブライアンが、ニューヨーク大学かどこかの聴講生になっているとばかり思っていましたから」

そう語るのは、心理学講座副主任のピーター・フランクス教授だ。

「それにしても、まったく驚くべき変容です。じつに興味深い。できれば、彼女の心をとらえたい……い、いや、もちろん、心理学的に分析してみたいという意味です」

学生たちは、もう少し率直だ。

「ブライアンは、いつも青白い顔してたから、きっと穴蔵みたいな部屋で暮らしているにちがいないなんて言ったんだ」

声を変えた匿名の院生が証言する。

「そこから飛び出したのは、大正解だよね。……え？ もちろん。女性研究員として戻ってきても、何の問題もないさ。というか、そうしてくれた方が……。あの脚を毎日見られるなら……」

ブリアナは、残りの週末を実家で母とともに過ごし、いっしょにショッピングにも出掛けた。

「家の近所も、なんだかちがった景色に見えるの。番組のオーディションに出場申し込みをした頃、あたしの目に見えてたのは、図書館とゲームセンターくらい。でも、この町には、こんなにいっぱいすてきな場所があったの

ね。そんなこと、思ってもみななかったわ。だけど、それに気づいちゃったのは、ここに戻ってからの研究生活には、問題多いかも」

ブリアナの母は、カメラにウインクしながら言う。

「あの子は、まるで今気づいたみたいに言うけど、そんな話、私は、高校生の頃からさんざんしてたのよ。まあ、わかってくれてうれしいけど」

ブリアナが心理学者たちの探求心を駆り立てている頃、ディーナと妻のレベッカは、映画の都での「休日」を楽しんでいた。

「ディーナは、この数ヶ月間、ほんとに大変な毎日を乗り切ってきたんだと思うわ」

ちょっと誇らしげに、レベッカは言う。

「だから、友だちと顔合わせする前に、二人でショッピングを楽しもうと思ったの」

二人の女性は「ロデオドライブ」(※)をたずね、チャージカード（番組の衣装予算の一部を使いディーナに渡したものだ）を惜しげもなく使った。間もなく二人は、おそろいのイブニングドレスから大胆な露出のビキニトップまで、さまざまな服を手に入れていた。

(※訳注 ‘Rodeo Drive’ ブランドショップが並ぶビバリーヒルズの中心街)

「前にいっしょにビューティサロンに行った時にも言われたけど、今回は、この前よりもっと、お店の人から姉妹かってきかれることが多かったわ」

ディーナはそう言う。

「まさか、夫婦ですとも言えないでしょ。最初はごまかしてたんだけど、あんまり何回もきかれるから、結局そう

いうことにしちゃったの。実際の話、この週末の間、あたしとレベッカの関係がそういうものだったことはたしかね。家にいても、二人でお互いの髪をやりっこしたり。それだけ。なんか、ちょっと悲しい気はするけど、夫と妻でいる時より、もっと近づけた感じもするの」

とはいえ、友人たちが集まるパーティで、参加者たちが色めき立った時、ディーナはそれとはまたちがう感想を持ったようだ。

それは、俳優仲間ザックのお祝いパーティだった。

「じつは『オースチン・パワーズ』の新作で、セリフのある役が決まってさ。その撮影でピッツバーグに行くことになったんだ。で、友だちに集まってもらったわけ。気がつくと、レベッカが

来てるじゃない。しばらく見かけなかったんで、この間、どうしてたのかって声をかけた。そこでやっと、レベッカだとばかり思ってたそのチューブトップの女の子が、よく似てるけど別人だとわかったんだ。その上、なんとあの……デビッド！」

ザックのサクセスはしばらくの間忘れ去られ、1ダースの失業中の俳優たちがディーナを取り囲んだ。

「へえ、テレビの仕事をしてるのか？ やがてはまた、映画も狙ってるんだろ？」

「全国放送だって？ くそっ、ブレイク間近ってこと？」

「ねえ、美容整形って高いの？」

「なあ、お前のコネで、テレビの仕事とれないか？」

「けっきょく、ハリウッドって、ウレ

るためなら何でもあり。やけくそなところなのよ。この何ヵ月かで、あたしがどんなふうに変わったかなんて誰も気にしてないし、どれほどやけくそな気分追い込まれたかなんて、誰も真剣に考えてないの」

ディーナは言う。

「まあ、ここでは、そのやけくそ度合いを、個性とか才能とか呼ぶんだけどね」

このパーティのうわさを聞きつけ喜んだのは、以前ディーナが契約していたエージェント、エベレット・エバースだ。

「“TV” タレント、ディーナ、すばらしい！ 彼女が再契約してくれるなら、仕事はいくらでもとってくるよ。……ん？ デビッド？ 誰それ？」

そこから東へ1000マイル。ラモナは、何人かの親戚や友人と会おうとしていた。

じつは、「ロドリゴ」のビザのままメキシコ国境を越えれば、アメリカへの再入国が許可されない危険性があるため、ラモナは、テキサス州エルパソの農場で、出稼ぎに来ているいとこや友人たちと会うことになったのだ。

大地から立ちのぼる熱気とテキサス特有の乾いた風の中、ラモナの、背中が大きく開いたサンドレスがかすかに揺れていた。

その隣には、それよりずっとひかえめなTシャツとジーンズ姿のフィアンセ、ピラルが寄り添っている。

「あたし、びくびくしてました。友だちが今のあたし見て、どんな……あ〜ん？……そう、反応……どんな反応するか、それが恐ろしかった。知ってま

すね？ メキシコ、マツチョの国。ホモ、許さない。女のあたし見て、どんな反応するか……」

その言葉どおり、恐怖にひきつったような顔で、ラモナとピラルは、出稼ぎ労働者のグループに向かって歩いていく。野菜農場での重労働からひととき解放され、昼食をとっているのだ。

その中の6・7人の男が、ピラルに気づき、驚いたようにスペイン語で声をかけた。そしてすぐに、いっしょにいるアミーガは誰かという視線を送ってきた。

「みんな」

ラモナがスペイン語で呼びかける。「ロドリゴだよ。でも、これからは……ラモナって呼んで。あたし、アメリカで、テレビスターになろうとしてるの」

1分近い間、息づまるような沈黙が

つづいた。

しかし、やがて、一人が笑いかけた。
「ロド……ラモナ、俺は、責めたりしないよ。こんな暮らしから抜け出すために、お前が、どんな思いでそんなことをしたか、わかるよ。そんな上等な服着て、そんなべっぴんになって、どうやらうまくやってるみたいじゃないか。もう、果物を摘まなくていいんだろ。だけど、俺たちのこと、これからも忘れないでくれよ」

泣き出したラモナのもとに友人たちが駆け寄り、代わる代わるに抱きしめた。

彼女が、本心を吐露したのは、モーターに戻ってからだ。

「あたし、恥ずかしいです。いえ、ドレスのことじゃない。胸のことでもない。あたしの全部が……。あたしの全

部が、女になってる。だから……もう、あの仲間に入れない。だから、毎年毎年、国境行ったり来たり、しなくていい。貧しい家族のため、そんなこと、しなくていい。あたし、泣き虫の……弱い、女だから。……つらいけど、あの男たちの言ったこと、正しい」

そこで、ふたたび黙り込むと、ラモナは、モーテルのベッドの上に座り込んだ。

ピラルは、かつて彼女の男だった女の肩を、いつまでもなでつづけた。

うすら寒いボストンの街で、ティラーは、かつてのバンド仲間と合流しようとしていた。

「やつらは『ドリンク・トゥ・フォーゲット』って店で、プレイしてるはず……」

古着のアーミーパンツ、薄汚れたス

ニーカー、よれよれのTシャツ、そして黒の革ジャン……今夜のティラーは、そんな格好をしていた。肩にかかったピンクの髪も、もつれ気味。おまけに、メイクもしていない。

じめじめしたライブハウスだというのに、店の入口には、入場を待つ列ができています。ティラーは、その最後尾に並んだ。

と、そこに並んでいたロック・フリークたちの目が、彼女に釘付けになった。

そんな格好をしていても、今のティラーは、注目を集めてしまうのだ。

その視線に耐えられず、ティラーは、列をかき分けるようにドアに向かった。誰もそれを止めようとせず、むしろ、道を空けてくれた。それどころか、ドア係の男さえ、入場料も取らずに通してくれた。

中に入ると、ティラーのかつての仲間たちは、彼らにしては珍しく、バラードナンバーを演奏していた。

客席の中にそのセクシーなロック娘を見つけ、ジェフは、ギターのフレーズをミスした。

彼は、キーボードプレーヤーになにかささやき、キーボードプレイヤーは、それを、ドラマーに、そしてボーカルに伝えた。

そこで突然、歌が止まった。

ブーイングしはじめた観客に向かい、ジェフが呼びかけた。

「みんな、俺たちのベーシストが帰って来たぜ。最高のベーシストで、最高にイカしたベイビーだ。さあ、上がって来いよ、ティラー」

ティラーがステージに上がり、借り物のベースのストラップを肩にかけると、それだけで、観客の興奮は最高潮

に達した。

「いくぜい！」

熱狂のジョイントが終わり、楽屋で、ティラーは当然、質問攻めにあった。

「なぜこうなったか？ そんなの、どうだっていいでしょ。ファッ（Pー）！」

今のあたしは、こんなにセクシー。最高にロックン・ロールよ」

それでも浴びせかけられる質問を振り切るため、ティラーはジェフの手をつかむと、引きずるようにして楽屋を飛び出し、バンドのワンボックスカーへと向かった。

「二人で飛ばしてくるわ。車は、明日の朝返す」

インタビューを撮ろうと近づいた番組のカメラマンをはねとばすようにして車を発進させたティラーは、そのまま裏道へと走り去った。

激しく揺れる画面の中で、助手席のジェフはあ然としていたが、その表情は、どこか幸せそうに見えた。

2日後、4つの空路を経て、女の子たちはチーム・キティの寮の居間に座っていた。

その空気は、張りつめている。

残れる可能性は50パーセント。それが緊張の理由だ。

いつも動揺をみせないティラーさえ、顔をこわばらせている。

「みなさん」

ミスター・ベナダがそのジャッジの始まりを告げた。

「ここに残った4人、いや、最終選考に残った8人すべてが、われわれの予想をはるかに超えた変身ぶりを見せてくれました。もし、あなた方の真剣さがこれほどのものだと先にわかっ

たのなら、8人すべてになんらかの賞が贈れるよう準備したのにと、それが悔やまれてなりません。しかし、ルールはルールです。ここで、2人を落とさなければなりません」

スーザンは、涙を必死にこらえるようにして、自分のチームの脱落者を告げた。

「ごめんね、ブリアナ、許して。あなたは、どこに出しても恥ずかしくない女の子よ。美人でかしこくて、すてきなレディになったわ。でも、審査員たちは、ほんの少しだけ、ディーナの方が女性的だと判断したの。気を落とさないでね」

不思議なことにブリアナは、これまでに落とされた女の子たちとはちがい、ほほ笑みとともにうなずいた。そして、逆に、涙がマスカラをとかしはじめたディーナの肩をやさしく抱きし

めた。

「そんなふうに泣かないで。この何ヵ月間か、あたしは、これまでの人生でいちばん充実した毎日を送れたんだから。とてもまともとは言えないことだったけど、あたしはぜんぜん後悔してないわ。ほんとに、やってよかったと思ってるの。大学に戻るまでにはまだ1ヵ月以上あるから、それまでに、まだやりたいこともあるし……。お互い、これからもずっと連絡を取り合うようにしましょ。だって、あなたは、あたしの大切な友だちだもの」

ブリアナは、笑顔とともに寮を出た。カメラが納めたその後ろ姿は、そこに待っていたらしい車の中に消えた。その車には、たしかに見覚えがあった。あれは、ブリアナが初めてのデートに出かけるとき……。

しかし、ブリアナの結末についてのほほえましい憶測をかき消すように、ルペが、もう一人の脱落者の名を告げた。

「ラモナ、ほとんど同点だったそうよ。でも、スタジオの観客たちは、ほんのちょっとティラーの方がお気に入りだったみたいなの」

うなだれたラモナは自分の気持ちを表す英語が見つからなかったらしく、そのまま、静かに部屋を出て行った。そのあとを、ティラーがあわてて追った。

「つらかったわ」

しばらくして戻ってきたティラーが語る。

「ラモナは、私を責めるようなことは、これっぽっちも言わなかった。でも、彼女は、これからどうすればいいの？」

結婚が決まってるのよ。それなのに、もう、花婿になれないのよ」

ラモナは、なにも言わずに去った。残った二人が涙を納めるために、しばらく時間がおかれた。

そして、ついに、ミスター・ベナダが、最後のチャレンジの内容を告げる。「これまで、われわれは、次々に課題を出し、いわば強制的に、あなたたちを変えてきました。服や、体や、さらには心まで。そこで、今度はあなたたちの番です。最後のチャレンジは、あなたたち自身で決めてください。『ホッティ』の栄誉と何百万ドルもの賞金を得るために、どれだけの決意があるのか、あなたたち自身の意思で見せてください。どちらが最高の女性なのか、どちらが最高に女性なのか、私たちに示してほしいのです。期限は1週間。

スタッフも予算も、番組が用意しているものはすべて自由に使ってかまいません」

【第6回放送】

最終回は、まず、この1年間のハイライト映像から始まった。

女子寮に到着した8人の男たち……初めてのメイク……初めての外出。

笑い……涙……次第になめらかになっていく肌……曲線に縁取られていくプロポーション。

そのあと、8人の集合写真が映し出され、それが……ファイナリストの二人——ディーナとティラーだけになる。

「まったくクレージーな1年でした」
ファン・ベナダが観客に語りかける。

「すべての挑戦者たちが、この、いわば馬鹿馬鹿しい試みに、あれほど真剣に取り組むとは、そして、あれほど美

しく変貌するとは、いったい誰が想像したでしょう。間近に迫るその決着を前に、彼女たちをここまで育てた二人の寮母から、みなさんにお話があります」

「私は、あの子たちをこれ以上ないくらい誇りに思っています」

まず、チーム・フォックスの寮母、スザンヌが話し始めた。

「4人が4人とも、最大限の努力を示してくれました。この場にディーナが選ばれたのは当然の結果だと感じていますが、一方で、他の結果になってたとしても、つまり、他の誰が選ばれていたとしても。私には何の文句もありません。クリスは、体つきを大きく変貌させました。性格を最も変えたのは、ブリアナです」

よくぞこれだけすばらしい素材が集まったと、スーザンは、そう言いたい

のだろうか？

「いえ、そういうことじゃないの」

40代であるにもかかわらず、そのローカットのイブニングドレスで、未だセクシーで張りのある体を見せながら、スザンヌは首を振った。

「変わろうと思えば、誰でも変われるのです。たとえば私は、美容師になる前、女優をしていました。女優の前は、モデルでした。その前は、ナイトクラブの歌手。そしてその前は……海兵隊員でした」

観客たちは、そのジョークに笑った。スザンヌが、色あせた「USMC」のタトゥを示すまでは。

背後のスクリーンに、彼女の19歳の時の写真が映し出される。クールカットの髪、海兵隊の制服……どこから見ても、若い男性兵士だ。

「私の場合は、自らすすんでこうなっ

たわけではありません。ソマリア侵攻で負傷した結果です。その部分に、人工の偽装具を装着するという方法もありました。でも、不完全な男として生きていくより、こうなった以上、人生を切り替え、完全な女をめざそうと決意したのです」

観客はしばらく、息を呑んだように沈黙していた。しかし、そのショックは、やがて感動へと代わり、かつて戦争で負傷した少年兵だったという、その美しい女性に、惜しみない拍手を贈った。

そこでファン・ベナダは、今度は、チーム・キティの寮母、ルペにマイクを向けた。

「私は、この仕事を面白そうだと思って引き受けました。でも、こんなにつらい思いをすることは考えてもみません

でした。タミーがかかえていた家族の問題、ラモナの貧困、そしてニッキのすさんだ心。ティラーがチーム全員を元気づけてくれなかったら、私は、この仕事を途中で放り出していたかもしれません。ですから、彼女が勝ち上がってくれたのはうれしいですが、一方で私には、たとえばタミーがこうなってくれていたらという気持ちもあります」

ファンはそこで、その25歳のモデルに、彼女たちがあそこまで変わったのは、あなたの力かときいた。すると、その元ミス・チリは、ほほ笑みながら首を振った。

「私には、彼女たちの意思を超えてできたことなど、ひとつもありません。たとえば、あのニッキでさえ。彼女たちは自分の意思があったからこそ、あそこまで変わったのだと思います」

うなずいたファンは話を変え、あなたには観客を驚かせるような秘密はないのかときいた。と、ルペは、カメラに向かってウインクした。

「ええ、ちょっとだけ。私は鼻を整形しています」

観客はそれに、安心したように笑い声をたてた。どうやら、ステージ上の美人のうち、一人だけは本物のようだ。「どうしても手術が必要だったんです。だって、前に三回も骨をつぶされているんですもん。私が……フェザー級のボクサーだった時」

さあ、コマーシャルが明ければ、いよいよ、ファイナリスト二人の登場だ。

最後のエストロゲン・チャレンジでどんなことをするのか、それは彼女たち自身に任された。

彼女たちは、審査員たちに、どちら

が勝利への意欲が大きいのか、そのためにどれだけのことができるのか、それを証明してみせなければならない。

先に登場するのはディーナだった。

観客たちは、彼女が勝利のためにどんなパフォーマンスを見せてくれるのか、期待を込めて見守った。

ところが、そこでステージに現れたゴージャスな女性は、ディーナではなく……彼女の妻、レベッカだ。

観客はそれに拍手はしたものの、狐につままれたような顔をしている。

レベッカは、美人コンテストのようなレオタード姿で、それはそれですばらしいのだが、少なくともこのコンテストの出場者ではない。

観客たちは、わけがわからず、ざわめきはじめた。

と、そこへ、もう一人の女性が登場

した。……レベッカ!?

衣装も見かけもまったく同じそのレベッカ2号は、ステージ中央まで進み、先に立っていた方と並んだ。

観客たちのざわめきが、さらに大きくなった。

「最後のチャレンジの内容を聞くと同時に、ディーナとレベッカは私のもとにたずねてきました」

現れたのは、ドクター・フリーマンだ。

「ディーナの姿を、レベッカとまったく同じにしてくれと言ってきたのです。それは簡単なことではありませんでした。それに、そのためには、レベッカの側にも多少の修正を加えることが必要でした。でも、私は、なんとか二人の要求に応えることができたと思います。ご覧のように、今二人は、双子そのものです。パンティの中でも見

ない限り、どちらが本物のレベッカかは区別が付きません。施術した私ですら、そうなのです」

二人のレベッカが下がると、観客たちは、次に登場するはずのティラーにどんなことができるのかと首をかしげた。自分の妻のクローンになるという以上のことが、果たしてあるのだろうか？

ルペでさえ、ステージ上に出てきた彼女のチームの代表が、なにをするのか聞かされていなかった。

ティラーは、いつもの彼女とちがひ、シンプルなスカートとセーター、それにハイヒールというおとなしめの服装だ。ピンクだった髪も、もともとの色である茶色に染め直されている。

ステージ中央まで歩くと、彼女は、唐突に、そして音楽や説明さえなく、

着ているものを脱ぎはじめた。

ストリップのように気を持たせる素振りもなく、ただ淡々と、そして……すべてを脱いだ。

彼女は、観客の前で、一糸まとわぬ姿で立っていた。白い肌の上で、二つの乳輪と、腕のバレンタインタトゥーだけがピンクに色づいている。

放送時には加工が施され、テレビ視聴者たちは見ることはできないのだろうが、そこにいる観客たちは、その体に、ある重要な部分が欠けているのを発見していた。

ふたたび登場したドクター・フリーマンが、今回の変身にも自分が関わっていることを認めた。

「すべてティラーの意思でしたことです。私はこの手の手術の資格を持っていませんが、カリフォルニアの同業者がそれを引き受けてくれました。そし

てティラーは、サンフランシスコのその医師のもとに、感謝の言葉と、あるものを残してきたわけです」

立ち合っていたテレビコードの検閲係が収録を中断させ、ティラーを別室に連れて行き、ふたたび服を着させている間に、スタジオでは、どちらを優勝とすべきか、観客からの意見聴取が行われた。

さまざまな意見が述べられ、議論は伯仲した。多くの人が、ティラーが払った犠牲の方が大きいと言い、他の人々は、ディーン夫婦の払った犠牲も、若いロッカーの子種に匹敵するはずだと言った。

その上で、最終結果は、観客たちの投票で決めることになった。

30分後、ティラーと二人のレベッカ

が、ふたたびステージに立った。それぞれの手はつながれ、うり二つの二人は多少緊張気味に、ティラーは屈託なく、ほほ笑んでいる。

「ステージに立つすてきな女性たちに、もう一度大きな拍手を。さて、あなた方は、ここにいるわれわれ全員を驚かせ、打ちのめし、魅了しました。その結果、優勝を決めたのはほんの数票の差でした。おめでとう……ディーン！」

その瞬間、二人のレベッカは悲鳴のような声を上げ、抱き合った。

スザンヌが勝者の冠を持って二人に歩み寄った。しかしそこで、どちらにかぶせるべきかしばらく戸惑い、結局、近い方の一人にかぶせ、もう一人には花束を渡した。

ティラーは、べつに落ち込む様子も見せず、二人にキスし、お祝いの言葉を言うと、ステージの袖に引き上げた。

勝者を称える歌が流れ、シャンパンが抜かれ、ひとしきり涙が流されたあと、二人へのインタビューが始まった。

二人は、自然にこぼれてしまう笑みの中でそれに答えた。

「優勝できたのはうれしいですが、あたしたちには、それよりもっとうれしいことがあります。あたしたち二人のつながりは今、かつての夫と妻という関係を超え、もっと深くなっています。あたしたちは、すべての運命をともにする双子の姉妹です！」

もう一人もうなずいてつづける。

「あたしたちは今、服も化粧品も共有し、お互いのメイクをしてあげることができます。二人はまったく同じ、一人の人格の中に解け合っているんです」

そう言われても、むろんインタビュアーは、大事な質問を避けては通れな

い。

……で、どちらが、本物のディーナ？

「彼女よ」

二人はユニゾンで答えた。

舞台裏で、ティラーも、最後のインタビューを受けていた。

もちろんこちらは、ステージとは打って過わたった静かな調子だ。

ずっと自信があるよう見えたが、優勝に期待を持ち始めたのはいつからかときかれ、彼女は肩をすくめた。

「自信があったわけじゃないわ。あたしは、優勝なんてどうでもいいと思っていただけ。みんな、すごくきれいになったし、すてきな人ばかりだったから。でも、こんなコンテストは馬鹿馬鹿しいと、ずっと思ってたわ」

……ん？ 負け惜しみ？

と、席を立ったティラーは、部屋の

隅から見守っていたジェフにつかつかと歩み寄った。

「ジェフ、こんなこと、ぜったいに言うことはないと思ってたけど……。あなたのこと、愛してるわ。高校で初めて会った時から、ずっと、愛してました」

ティラーは、自分の思いを振り絞るとでもいうように、緊張した表情で言っていた。

「でも、あなたが、あの頃のあたしを愛してくれないことはわかってた。だからあたしは、こんな馬鹿な番組に出る気になったの。たぶんこれが、あなたを幸せにさせてあげられる存在になる唯一のチャンスだと感じたから。今のあたしは、まちがいなく、あなたを幸せにさせてあげられるわ。もし、あなたがそれで……」

ティラーの告白は、ジェフの唇によ

って中断させられた。そして、再開する機会すら与えてもらえなかった。

番組のクルーは、そこで撮影を終え、撤収作業をはじめた。

8ヵ月後、すべての登場人物のプライバシーに関し、法的問題が生じないことが確認されたところで、番組はオンエアされた。

【スペシャル特番】

「ザ・ホッティ！」の最終回の放映から1年が経過した。

今ではそれは、リアリティTVの歴史の中でも、画期的成功を収めた番組のひとつに数えられている。

しかし、放送終了直後から、ネットワーク各局は、視聴者からの電話に悩まされた。

収録後、登場人物たちがどうなったのか、それを知りたいという電話だ。

タミーは、家族と和解したのか？
ラモナはメキシコに戻ったのか？ ティラーとジェフは、その後どうなったのか？ そして、なにより……

あの女の子たちは、その後、女の子をやめたのか？

番組冒頭、画面は、教会の内部を映

し出した。

といっても、その雰囲気は、静寂の中にあるわけではない。ウエディングベル、リボン、その他さまざまな飾りつけが、所狭しと取りまいている。

幸せな日を迎えたカップルとは、いったい、誰と誰なのだろう？

招待客たちが次々に到着する。

……ん？ なじみの顔？

……あれは、カーラだ。8人の中ではわりと初期に落とされてしまったけれど、印象深かった、自由を愛するヒッピー娘。

着ているのはスカートとブラウス。背中にはロングヘアが揺れている。

彼女はいったいどうしていたんだろう。さっそくインタビューしてみよう。「えっ？ 落とされたあと？」

彼女は、カメラに向かってちょっと

舌を出すようにしてからつづける。

「妹のエイミーと、カリフォルニアまでのんびり旅しながら帰ることにしたのは、知ってるでしょ。じつは、その旅の途中、アリゾナで、古いけどいい感じの家が売りに出てるのを見つけたの。で、ビジネスローンでお金を借りて、思い切って買ったちゃった。そこで民宿をはじめめるためにね。いっしょにレンタサイクルのショップもやってるの。むしろあたしは、そのレンタサイクルの方が中心で、宿泊客のお世話をしてるのは、パートナーの方なんだけど」

えっ？ パートナーって？

大きなプレゼントを持ってきたばかりに、入口あたりでよろよろよろめいているのは……タミー!? 父親との争いが、放映と同時に全米の涙を誘った、あのカントリーガールだ。

最後に見た時より髪はちょっと短いけれど、女らしさも、そして、すらりとした長い脚も変わってはいない。

「ちょうどあたしが街を出ようとした時、目の前に、カーラとエイミーの乗ったバンが停まったの。寮の誰かが、あたしのことを、彼女に電話で知らせてくれたらしいの。カーラは、寮で姉妹みたいに暮らした人をホームレスにするわけにいかないって……。それで、いっしょに旅をして、アリゾナであの家を見つけた。あたしも気に入って、二人で共同経営しようってことになったわけ。カーラが、宿泊客たちをサイクリングツアーに案内している間に、あたしは、掃除をしたり、宿泊客たちの夕飯をつくったり……。お客さんにも評判がよくて、経営も順調よ。夏休みの間はエイミーが手伝いに来てくれるけど、もう手いっぱい、そろそろ

誰か雇わなきゃって相談してるよ。夜になると、もうぐったりしちゃって、二人でベッドに転がり込むの」

ん？ 二人でベッドに？

カーラとタミーは、それ以上詳しくは話さないが、カーラの腕は、しっかりとタミーのウエストに巻きつけられている。

パートナーというのは、単にビジネスパートナーというだけではなさそう

と、そこで、カーラとタミーは入口のあたりを見て、かん高い声をあげた。そこに、かつての姉妹を見つけたようだ。……クリス！

クリスは今ももちろん背が高く、そして、あの頃より筋肉がついた感じだが、女らしい身のこなしやすらりとした体型は、まだそのままだ。

二人に気づいたクリスが、うれしそうに、近づいて来た。

「正直言って、シカゴに帰った時は、男に戻ろうとしてたの。でも、ジェナとバスケットをして遊んでる時に、また、足首を痛めちゃって……。今度こそ、もとのようには回復できないって言われて、ついにプロの夢はあきらめるしかなくなった。ジェナはそれに責任を感じたらしくてね、彼女が所属するソフトボールチームのアシスタントコーチの仕事を世話してくれたの。今は、もう、そこの監督になってるのよ。他にも、女子バスケのコーチもやってるし、ハイスクールの女の子たちにメンタルトレーニングの指導もしてるわ。今シーズンは、ベアーズのホームゲームで、名誉チアリーダーに立候補しようと思ってるの。もちろんこれは、あたしが目指してた道とちがうけど、

悔しいことに、けっこう毎日、楽しかったりして」

クリスへのインタビューは、彼女が二人の旧友を見つけたことで終わった。

視聴者を感動させたメキシコのセニョリータ、ラモナと、それにぴったり寄り添うフィアンセのピラルだ。

「もう、フィアンセじゃありません。あたしの奥さん」

ラモナはきっちりと訂正した。

「番組で落とされたあと、あたし、婚約を解消しよう言いました。でも、ピラル。それ、いやだと言いました」

「ラモナ、結婚してくれました」

ピラルも、片言の英語でつぶけた。

「私、男でも、女でも、ラモナ好き。ラモナ、私の奥さん。私、ラモナの奥さん。しあわせ」

そこでラモナは、二人の結婚式の時の写真をとりだした。

そこには、おそろいのウエディングドレスを着た二人の花嫁。どちらがきれいかなどと、野暮なことは、この際言わないでおこう。

「番組降りたあと、あたし、どうしたらいいか、わかりませんでした」

ラモナが、思い出すように言う。

「でも、番組のこと聞いた、ロサンゼルスのエージェントが連絡してきた。ヒスパニック向けのケーブルTVで、スペイン語のトークショーやらないか、ただし、ホステスでいいならだけど、って。もちろん、あたし、イエス言いました。何ヵ月かして、結婚しました。今、私、メキシコの家にお金送って、地元のメキシコ移民たち助けて、まだ余るくらい、収入あります」

ピラルもそれにニッコリ笑う。

「そう、ほんとに。ラモナ出るの、週2日だけなのに」

しかし、スターになったのは、ラモナだけではない。

ディーナとレベッカが入ってくると、教会内の客たち全員がそちらを向いた。あちこちで、カメラのフラッシュが光る。

1日として目にしない日のない、2人のハリウッド・プリマドンナ。

次々に友人たちに取り囲まれるその双子のスターに、インタビューする順番はなかなかまわってきそうもない。

でも、いまさらその必要もないだろう。彼女たちのことなら、みんなが知っている。

映画の都は、このうり二つのアイキヤンディを、まだまだこき使うつもりらしい。ロマンティックスリラー「ヤ

ッホー・クトウルフ」からコメディ「ブ
ロックバック・トラクション」まで…
…この二人の美女たちに寝る暇はある
のだろうか？

もちろん、ハリウッドの主演男優の
多くが、彼女たちをベッドに連れ込も
うとしたという…まあ、タブロイド
紙を信じればという話だが。

「あんなの、ウソよ」

と、ディーン、あるいはレベッカが
声をかけてきた。

「まあ、ほとんどはね」

おや？ みんな楽しそうなこのウエ
ディング会場に、一人だけ不機嫌そう
な女性が……。

ニッキ！ あのふてくされた態度で
注目を集めたグラマーな挑戦者が、か
つての寮友を避けるように、一人で座
っている。

豊かな胸の上で腕を組み、真っ赤な唇をとがらせて……そんなにいやなら、いったい彼女は、なぜここに来ようと思ったのか？

「気にしないで」

そう声をかけてきたのは、ニッキの元恋人、キアだ。

「彼女、当然、来るのをいやがったわ。でも、私がむりやり連れてきたの。彼女、私には逆らえないのよ。私が申し立てれば、彼女はたちまち自己破産者。彼女のしてた借金、全部私が肩代わりして、今は私が債権者なの。で、私のハウスメイドとして働いて返してもらうことにしたの。彼女は今、昼間は、女子学生として学校に行ってるわ。まともに考えてるなら、今度は逃げ出さずに卒業するでしょ。夜は、勉強以外の時間、私の家の家事をしてる。まあ、週末は、いっしょに出掛けることも多

いわね。……えっ？ デートなんかじゃないわよ。私、女の恋人を持つ気なんてないもの。私には今、ちゃんとしたボーイフレンドがいるの。彼女にもそんな人ができればいいと思ってるわ。そう言うと、いつもいやな顔するけどね。でも、借金完済まであと2・3年はかかるから、それまで彼女は、美人で従順な女の子やってなきやいけないの」

最後にやって来たのは、ロックスター、ティラーとジェフ。

ティラーは、この席に合わせ、より女らしく見せる努力をしているようだ。それはまあ成功しているが、やはり彼女には、今着ているシルクより、レザーの方が自然だ。

ノースリーブのドレスの腕にはバレンタイン・ハート。今では「ジェフ」

の名前がしっかり入っている。

みんなにきかれ、彼女は、ジェフの腕にも「ティラー」のタトゥが入っていることを認めた。

「ちょうど、新しいアルバムの収録が終わったところなの。だから、まだ、やらなきゃいけないことが多くって」

ティラーは言う。

「そのアルバムを中心に、夏に全米ツアーをするのよ。でね、それが終わったら、たぶん、またみんなに集まってもらうことになると思う。こんなふうになね。ふふ、あたし、こんなに幸せになれるなんて思ってもみななかったわ」

ジェフは、ほほ笑みながら、そんな恋人にキスすると、彼女を女友達のところに残し、オルガン奏者の近くに向かった。あれは、ジェフとティラーのバンドのキーボードプレーヤー。ジェフと彼が、この式の音楽を担当するの

だ。

二人が演奏をはじめ、客たちは席に着いた。

花婿が、付き添いの友人たちと現れ、そこで、曲はウエディングマーチに変わる。会場の後ろから、いよいよ花嫁が入ってくるのだ。

流れるように長い髪、オープントップのウエディングドレス、花のように輝く顔、そして……ん？ 太い、べっ甲めがね？

どうやら、本の虫から女の子をつくることはできても、そのブリアナに、本の虫をやめさせることはできなかったようだ。

ブリアナの母は、バージンロードをやってくるわが子の姿に、涙を隠そうともしない。

「あんなにきれいになって……。私は、

息子に、もっと積極的になってほしかっただけなの。でも、その代わりに、義理の息子ができちゃったわ。ブリアナが幸せになってくれるなら、私はそれで、うれしいの」

マーク……あの、ブリアナを生まれて初めてのデートにエスコートした青年は、これ以上ないほどの喜びの表情で、近づいてくる花嫁を見つめている。

今、彼からコメントをもらうのはちょっと無理だが、式のリハーサルのととで撮らせてもらったVTRがある。

「ブリアナのデートの相手を引き受けたのは、まあ、半分冗談みたいなものだったんだ」

彼は正直に認めた。

「彼女に、あんなタトゥを入れちゃった責任も感じてたしね。それにしても、あの時は、こんなふうになるなんて思ってもいなかったよ。ところが、ブリ

アナから、番組を降りることになったって電話をもらったとき、僕は、本当にうれしかった。その夜、車で彼女を迎えに行って、それから今まで、ほとんどいっしょにいるんだ。ブリアナは、僕が女性に求めるものを、すべて持ってた。かしこくて、楽しくて、その上、あんなにきれいなんだから。彼女には、博士号をとるための勉強をつづけもらいたいと思ってる。その間、僕が稼ぐから。だから、できれば、あんまり他のことで忙しくならないでほしいんだけど……」

二人が誓約の言葉を述べると、かつての「ホッティ！」挑戦者たちは、みんな涙を流した（まあ、ニッキはちがうかもしれないけれど）。

ライスシャワーの後、場面はパーティに代わり、ケーキカットや、スピー

チがあり、ディナーとなった。

「こうしてまた、みんなに会えるのは、ほんとにうれしいわ」

花嫁席でのブリアナへのインタビューだ。

「でも、どうやら、来月また会えそうなの。じつはね、Jクルー(※1)と契約がまとまって、『ホッティ!』出演者全員で、来シーズンの水着キャンペーンモデルをすることになったのよ。あたしたち8人はもちろん、ピラルやレベッカも、それにたぶんエイミーも。できればみなさんから、彼女のママを説得してあげて。それから、ルペの誘いで、チャリティのためのチーズケーキ・カレンダー(※2)をつくることになるかもしれないわ。あたし、大学で研究する暇なんてあるのかしら」

(※1訳注 ‘J. crew’ 大手カジュアルファッションブランド)

(※2訳注 最近はやりのカンパ集めの方法で、さまざまな団体が女性メンバーのセミヌード写真を掲載して売るカレンダー かつてはチーズケーキを作って売っていたので、こう呼ばれる)

パーティは進み、ダンスが始まる。

マークはブリアナと、レベッカはディーナと、タミーはカーラと、ラモナはピラルと、ジェフはティラーと、あのニッキさえ、クリスにリードさせて踊り始めた。

いよいよ、花嫁花婿を送り出す時間が来た。

ブリアナが投げ上げたブーケをつかまえたのは、ティラーだった (もっとも、そこでクリスにからかわれ、彼女はぶすっとした顔をした)。

さあ、そろそろご覧いただいた視聴者のみなさんにもさよならを言う時間

だ。

最後に、今後、みなさんにお送りする予定の新番組をいくつか紹介して、お別れとしよう。

『ザ・ホッティ2 ～アメリカズ・スイートハート』

「ザ・ホッティ！」のネクスト・ジェネレーションを寮母として導くのは、ラモナとピラル。挑戦者は20人！

さらに強烈なエストロゲン・チャレンジ！ もっとセクシーな衣装！ あなたはこの刺激に耐えられるか？

『美女は野獣』

ハイスクールのオタク少年たちが、モテモテ・ギャルに大変身！ チェスクラブの部長は、ダンスパーティーのクイーンに選ばれるか？ コンピュータクラブのメンバーでチアリーダーチー

ムがつくれるか？ 女の子からフラれつづけているダサダサ・ボーイは、果たしてアメフト部のクォーターバックからデートの誘いを引き出すことができるか？ ダメ少年たちをスイート・シックスティーンに変身させるのは、ブリアナとクリスだ。

『太った負け犬たちII』

全国から集められた10人のデブ男。彼らが挑戦するのは、数百ポンドのダイエット！ えっ、そんなの面白いかって？ 彼らを指導するのは、あのドクター・フリーマン。そして、目標達成の期限は限られている。なにしろ、10人の男たちの変身は、ビキニ・シーズンのためなのだ！

『ヒールで1マイル』

妻に捨てられた5人のバツイチ男た

ちに、もう一度結婚のチャンスを！
ただし今回は、妻への挑戦！ ダメ夫
から専業主婦までの長い道のり。その
過程で、男たちに何が起きるのか？
彼らをナビゲートするキアとニッキに
ご期待を。

『主客転倒』

オンラインの女装コミック、女装ア
ート、そして女装小説の作者。彼らを、
実際に、自分たちのファンタジーの中
に放り込んだらどうなるのか？ 自ら
ヒロインとなった彼らの姿から、あな
たはもう、目が離せない！

Copyright(C)2007 by Brian

Based on the text FictionMania

Translated by Rino Maebashi

この「ザ・ホッティ！」は、ブライアンさん作のオンライン小説を、前橋梨乃が翻訳したものです。原作著作権はブライアンさんが、翻訳著作権は前橋が保持します。個人で楽しむ以外、無断でのコピーを禁止します。